

旅行者行動への類型論的アプローチ 「旅行者行動の心理学」に向けて (4)

佐々木 土師 二

A Review of Typological Approach to Behavioral Features of Tourists : Toward the Psychology of Tourist Behavior (4)

Toshiji SASAKI

Abstract

The social-psychological approach to typologies of tourists and their behavior is overviewed. In the field of empirical research, many typologies investigated by cluster analysis have been published, but most of them were ad hoc and not re-confirmed. The present writer stresses the necessity of constructing a typology based on more systematic features of tourist behavior. In the field of theoretical research, a series of ideal types proposed by Cohen is reviewed, and in order to develop the discussion on the typology of tourist behavior, the necessity of having a common conception of "tourist" and creating a theoretical framework of "tourist behavior" is emphasized.

Key words : tourist, tourist behavior, social-psychological typology, cluster analysis, ideal type.

抄 録

社会心理学的な立場から旅行者あるいは旅行者行動の諸特徴を包括的に記述する類型論が、実証的および理論的なアプローチによって展開されているが、本稿はその現状を概観することを目的としている。実証的には、クラスター分析にもとづく多くの類型化が提示されているが、それらの相互関連の検討や再確認が欠けているため、今後は、旅行者行動の諸分野の知見の体系化をふまえた類型化が必要であることが指摘された。また、理論的には、Cohen, E. による理念型の提唱が目立っているが、そうした論議をより広く展開するために、旅行者（ツーリスト）の概念の共通理解にもとづく「旅行者行動」の理論的枠組みの構成の必要性が強調された。

キーワード：旅行者（ツーリスト）、旅行者行動、社会心理学的類型論、クラスター分析、理念型。

この展望論文は、平成 6 年度在外研究（調査研究）の成果の一部を成すものです。筆者は、平成 7 年 1 月～3 月にオーストラリアの James Cook University の Department of Psychology and Sociology に訪問研究員として滞在し、Mike Smithson 博士の多大のご助力を得ながら「旅行現象の心理学的研究」に関して調査する機会をもつことができました。この論文は、その際に収集した資料をもとに執筆したものです。ご支援いただきました Smithson 博士、ならびに、そうした機会を与えていただきました関西大学および関西大学社会学部に謝意を表します。

1 問題意識

1-1 目的

旅行 (tourism) に関する社会心理学的研究に専門的心理学者が注意を向けるようになったのはごく最近のことであるとして、旅行に関する社会学的研究の先駆者である Cohen, E. (1984) は、1980年前後に発表された心理学的研究のテーマには動機、目的地での経験 (文化的・環境的なショック)、意思決定、態度などがあると指摘したうえで、特に旅行者モチベーションの研究に注目していた (p.377)。そして「旅行者のモチベーションは、旅行行動 (travel behavior) の即時的な満足や原因をとらえることによって評価されるような単純で短期的なプロセスとして理解すべきではない」という Pearce (1982, p.51) の言葉を引用して、そのモチベーションを、個人の長期的な心理的欲求や生活設計にいかに関結びつくかという観点から理解することが重要であることを強調していた。

この問題意識から Cohen (1984) は「自己実現 (self-actualization) のような本質的で内在的な動機が特に重要であるように思われる」と述べているが、状況・機会に直接に影響される一時的な場合から個人の人格的特性として比較的安定した方向性を示す場合まで、さまざまなレベルで考えることができる旅行者モチベーションについて、後者の視点の研究に関心を示していた。

確かに、理論的に一定の評価を得ている心理学的特性の体系的枠組みに関連づけて旅行者モチベーションを理解することは、旅行者行動を人間行動の一領域として、その普遍的側面に注目する意味で重要である。

しかし、このアプローチでは、旅行者行動の独自の特徴を人間行動の一般的特徴に収斂し抽象化することもある。したがって「旅行者行動」というような特定の行動領域の理論化では、その独自の特徴をとらえるような一般的枠組みを構成することが望まれる。

すでに佐々木 (1996b, 1997) が展望しているように、旅行者の目的や動機あるいは目的地の認知的魅力はきわめて多面的であるため、それを包括的にとらえるためになんらかの体系的な枠組みを必要としている。また、特定の旅行目的地に関する個々のケースについて考えても、その旅行者モチベーションは多様であるが、そうした個別事例の分析が特定の意味をもつためには、他の事例との比較を可能にするような一般的枠組みが求められる。

そのための試みが、たとえば旅行者の「モチベーション」や旅行目的地の「認知的魅力」のような特定の心理的機能に関する体系的枠組みの構成に向けられることは多いが (佐々木1996b, 1997)、他方で、旅行者あるいは旅行者行動の「類型論」として展開されることも少なくない。その類型化がもたらす現象区分が、知識の集約に役立ち、旅行者行動の個々の特徴的な現れ方

を相対的に理解するのに役立つと考えられるからである。

本稿は、旅行者行動に関する類型論的研究の動向にふれ、特定の心理的・行動的側面に焦点を当てた各論的な旅行者行動研究の展望作業を補完する中間的試みとしたい。

1-2 旅行者行動の分類のための発想の基礎

(1-2-1) 旅行形態の名義的分類

旅行者行動に関する類型論的アプローチにもさまざまなレベルがあるが、もっとも常識的な分類として、旅行現象に関する名義的区分がいわば「整理箱」的なカテゴリーとして示される場合がある。たとえば、観光旅行と業務旅行、海外旅行と国内旅行、短期旅行と長期旅行、団体旅行と個人旅行、社員旅行と家族旅行、周遊旅行と片道旅行など、比較的任意に分類標識を付ける形でのタイプ設定が行われている。また、日帰り旅行、週末旅行、帰省旅行、新婚旅行、修学旅行、卒業旅行など、特定の旅行形態を他と区別して表記するために名称を与えることも非常に多い。

この種の分類は、旅行に関するテキストブックや統計資料に表れることもある。たとえば Mill (1990) は、マーケット・セグメンテーションの視点から、旅行者をビジネス・トラベラー（業務旅行者 business traveler）とプレジャー・トラベラー（娯楽旅行者 pleasure traveler）に大別している（p.47-54）。

わが国での事例をみると、総理府内閣総理大臣官房内政審議室(1987)『第6回全国旅行動態調査報告』[『観光レクリエーションの実態』として刊行]では旅行の形態を「宿泊旅行」「海外旅行」「日帰り観光」と三つに大別したうえで、「宿泊旅行」には、次の8カテゴリーを設けている：

1. 観光（レクリエーション・スポーツなどを含む）旅行
2. 業務ついでの観光旅行
3. 家事・私用・帰省ついでに観光旅行
4. 学業ついでに観光旅行
5. 業務のための旅行
6. 家事・私用のための旅行
7. 帰省のための旅行
8. 学業のための旅行

これに似た分類方式は総理府広報室（1995）『旅行と余暇』調査（平成6年10月実施）でも採用されており、「1泊以上の旅行」について、「国内旅行」を次のように細分している：

- ア. 業務（研修、見学を含む）や商用のための出張旅行
- イ. 業務（研修、見学を含む）や商用のための出張旅行（観光、レクリエーション、スポ

ーツをかねたもの)

ウ. 冠婚葬祭, 帰省, 訪問などのための旅行

エ. 冠婚葬祭, 帰省, 訪問などのための旅行 (観光, レクリエーション, スポーツなどをかねたもの)

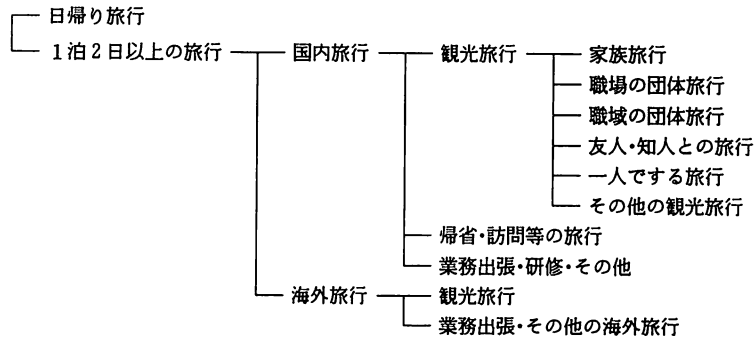
オ. 観光, レクリエーション, スポーツなどのための旅行

カ. 学校行事, 部活動などによる旅行

キ. その他の旅行

ク. 海外旅行

また, 総務庁統計局 (1988)『昭和61年社会生活基本調査』[『国民の生活行動』として刊行]における生活行動 (余暇活動) のなかの「旅行・行楽」の分類方式では, 次のように, 期間, 行き先, 目的, メンバー構成 (パーティ)などを組み合わせている。



(1-2-2) 旅行者行動の分類基準

こうした旅行形態に関する名義的分類は, 旅行者行動の特定の側面に着目したものであり, その範囲内で, それぞれの旅行形態の担い手である「旅行者」像が浮かんでくる。しかし, 上記の事例から想定される「旅行者」像は, きわめて限られた実態的外形を表すものであり, 人物イメージとして貧しいものであることは否定できない。

より豊かな「旅行者」像を描くためには, 旅行者行動に関する記述内容を多角的にすることが必要だろうが, それに対応した類型論的アプローチをとるとすれば, 旅行者行動の分類基準も非常に多面的になるはずである。

本稿は, 社会心理学的立場から, 旅行者行動の類型化の実証的および理論的な作業を展望するものであるが, この立場での類型論的研究で採用される分類基準は, 一般に, 旅行者の心理的・行動的な特徴である。

そうした特徴について、たとえば Hudman & Hawkins (1989) は、大分類として次の 8 カテゴリーを挙げている (p.46)：

1. 旅行の目的
2. 利用した流通・情報経路
3. 社会経済的・デモグラフィ的特性
4. サイコグラフィック的特性
5. サービスの必要条件
6. 目的地（旅行商品）に関連する好み・行動のパターン
7. 地理的要因
8. 旅行方法

この Hudman & Hawkins の挙げるカテゴリーにはそれぞれ 3～8 の細目が記載されているが、こうした分類基準のなかのどの基準にもとづいて類型化するかは、その作業の具体的目的や背景的条件に依存している。たとえば、前記 (1-2-1) の総理府や総務庁の調査では「1. 旅行の目的」と「8. 旅行方法」をごく概略的に把握することで、旅行形態を分類していることになる。

2 社会心理学的実証分析による類型化

2-1 異なる心理的レベルの特徴による旅行者行動類型化

(2-1-1) 一般的ライフスタイル特性を分類基準とした類型化の事例

前記 (1-2-2) の Hudman & Hawkins (1989) の分類基準のなかで社会経済的・デモグラフィック的特性やサイコグラフィック的特性を用いる場合に限っても、必ずしも旅行者行動に直接関連する特性ではなくて、一般的な人格特性やライフスタイル特性によることも多い。

そうした一般的分類基準による消費者類型と旅行者行動との関連についての分析事例は、すでに佐々木 (1997) によって若干紹介されている。

たとえば Madrigal & Kahle (1994) は、ロキーチ価値尺度 (Rokeach Value Scale) の簡略版 List of Value (LOV) を因子分析して抽出した 4 因子の因子得点にもとづいて 4 クラスターを構成し、そのクラスター間で旅行訪問地での活動内容を比較していた (佐々木 1997, p.48 ff.)。また、Shih (1986) は、一般的なライフスタイル類型を構成する VALS (Values and Life Styles) で区分した代表的 3 タイプの間の旅行目的地の選択理由を比較していた (佐々木 1997, p.50ff.)。

LOV や VALS でとらえる類型は、広範囲の生活行動に見られる普遍的で持続的な特性に

もとづくものであるために、種々の生活領域を横断的にとらえる場合に共通の分類基準としては有効であるが、特定の生活領域に絞られた比較的限定的な行動との関連は直接的ではなくなるのも止むを得ないと思われる。

(2-1-2) 「旅行」領域での包括的特性にもとづく類型化の事例

「旅行」という特定の生活行動領域での基本的で持続的な心理的特性を分類基準とすれば、旅行者行動の具体的な現れ方との関連をより直接的にとらえることができるだろう。

こうした発想での実証分析としては、すでに佐々木(1997,p.45)が引用している Taylor (1986) の、カナダの成人に関する娯楽・休暇旅行に関する3側面からのセグメンテーション分析のうちの「旅行に対する価値や取り組み」にもとづく、計画的冒険者、気軽な旅行者、低リスク旅行者、在宅旅行者という4セグメントがあり、それらは旅行者行動の包括的特性を反映したものであった。

旅行の価値に関しては、van Veen & Verhallen (1986) は「領域特有の価値(domain-specific value)」という概念を導入し、「休暇という生活領域」に特有の価値にもとづいて消費者セグメンテーションを行っている。その分析の概略も、すでに佐々木(1997,p.46)が紹介しているが、「休暇に関する価値」に関する60変数を設定するとともに、具体的な休暇行動として23変数を選定して、前者を予測変数、後者を基準変数とする正準相関分析によって五つの合成変量(正準変数)を抽出していた。これらは、「交通・宿泊手段も予約する計画的休暇」「海岸で過ごす休暇」「国内の緑豊かなところで過ごす休暇」「家族や子どもと一緒に過ごす休暇」「自宅で過ごす短期休暇 vs. キャンピングなどする長期休暇」というように解釈されるものであった。これらの正準変数には正と負の方向があるので、それぞれを独立にとらえると10セグメントが成立するはずであるが、第1～第3正準変数では各々一つの方角でしか実質的な意味を見いだせなかったところから、結局、次の7セグメントを構成している。

- | | | |
|-------------|------------|--------------|
| 1. 組織化された休暇 | 2. 海浜での休暇 | 3. 国内での休暇 |
| 4. 子ども連れの休暇 | 5. 1—2人の休暇 | 6. 長期のキャンプ休暇 |
| 7. 短期休暇 | | |

同じように Gladwell (1990) は、インディアナ州立公園への来訪者の「休暇に特有のライフスタイル(vacation-specific life-style)」を28特性でとらえるため、各特性を1～6項目で測定する6段階尺度を構成し、特性レベルでの評定値を用いたクラスター分析によって3クラスターを構成している。

この「休暇のライフスタイル」にもとづくクラスターの名称と特徴は次の通りである (p.17)。

1. 知識獲得型 (knowledgeable travelers) : 旅行への関心が高く、計画を立てる前に友人など広い範囲から情報を集める。歴史的・教育的な旅行に適度の興味を示し、集団で旅行するのが好きで、家族中心の休暇を好む。自信が強くオピニオン・リーダーだと考えられ

ることが多い。

2. 経費意識型 (budget-conscious travelers)：休暇旅行にある程度の興味を示すが、とくにそのコストを気にかける。教育的・歴史的な旅行には関心がなく、キャンピング、スポーツ参加・観戦にも一切興味がない。集団での旅行は好まない。
3. 計画万全型 (travel planners)：休暇旅行にも、事前の計画や準備にも強い興味を持っている。刺激を求めてあちこち移動するのでなく、リラックスすることを求める。キャンピング、スポーツ参加・観戦には興味がないが、旅行中に教育的・歴史的な機会を持つことには非常に関心がある。

Gladwell (1990) は、この3クラスターの間で、デモグラフィック特性や一般的ライフスタイル特性とともに若干の休暇旅行行動の特徴の比較もしている。

こうした「特定生活領域」レベルでの心理的特性を分類基準とした旅行者行動の類型化は、レジャー旅行のモチベーションの一般的構造を分析した Fodness (1994) の研究にも見ることができる。その概要もすでに佐々木 (1996b, p.58ff.) が紹介しているが、レジャー旅行のモチベーションに関する多次元尺度分析で、その機能的次元として知識機能、功利的機能（苦痛の最小化）、社会的適応機能、価値表出機能、功利的機能（報酬の最大化）という5次元を見出し、この次元構造が、因子分析によってもほぼ確認できることも明らかにして、これらの5次元特性を測定する20項目尺度を構成したものであった。

ところで Fodness (1994) の研究には、佐々木 (1996b) が引用していない内容として、フロリダの公立案内センターを訪れた自動車旅行者に対して行った質問紙調査（郵送回答）にもとづく結果の分析もある。それは、上記の5次元尺度で「最近のレジャー旅行についての満足度（7段階評定）」を測定し、585人のデータの因子分析によって5次元特性を確認したうえで、個人ごとの因子得点にもとづいて五つのクラスターを構成し、旅行に関するマーケット・セグメンテーションとしての有効性を検討している内容である。

ここで Fodness は、構成したクラスターに実質的特徴を表す命名を行っておらず、クラスター番号のみ付しているが、因子得点の平均値で見ると、それらには次のような特徴がある。

クラスター1 (28.0%)： 功利的機能（苦痛の最小化）と価値表出機能の2次元で正の高い値を示す。

クラスター2 (15.7%)： 価値表出機能と功利的機能（報酬の最大化）の2次元で正の低い値を示すが、逆に、知識機能で負の高い値を示す。

クラスター3 (18.3%)： 正の高い値を示す次元はなく、功利的機能（報酬の最大化）で負の高い値を示す。

クラスター4 (22.6%)： 知識機能と功利的機能（報酬の最大化）で正の中位の値を示すが、これらよりも、功利的機能（苦痛の最小化）と知識機能での負の値の方が大きい。

クラスター5 (15.4%)： 功利的機能の2次元（苦痛の最小化，報酬の最大化）で正の中位

の値があるが、逆に、価値表出機能で負の高い値を示す。

こうして構成されたクラスターの間で、デモグラフィック特性や旅行者行動要因の諸変数を比較した結果、各クラスターのプロフィールを描き出しているが、次のように要約できる (Fodness, 1994, p. 574)。

クラスター1： 退職者が比較的多く、学歴も比較的高い。多人数で子ども連れの旅行が多いが、RV（多目的レジャー車）の利用は少ない。旅行の計画期間が長く、ホテルやモーターに滞在することが多い。

クラスター2： 退職者が半数以上を占め、子どものいない世帯が多く、学歴はもっとも高い。子ども抜きの人単体の旅行が多く、情報源としてパンフレットよりも雑誌を利用し、レストランで多く支出する。

クラスター3： 子どものいる世帯が多く、学歴は高い。旅行の計画期間は一番短く、宿泊ではホテル・モーター、キャンプ場、RV用パークなどの利用が少ない。

クラスター4： 子どものいる世帯が多く、学歴は一番低い。トラックやバンで旅行する人が多く、娯楽や土産物への支出が多い。

クラスター5： 子どものいない夫婦やティーンエイジャーが比較的多く、高卒以上の学歴の人が多く。RVでの旅行が一番多く、キャンプ場やRV用パークを利用するが、ガソリンにも多く支出する。

このFodness (1994) の分析では、クラスター構成の基礎になる旅行者モチベーションの機能的次元の意味の抽象度が高く、また、その実質的特性内容にもとづく次元の構成ではないために、各クラスターにおけるモチベーションの特徴と旅行者行動との結びつきを明確には把握することができない。

(2-1-3) 旅行者行動の限定的側面を分類基準とした類型化の事例

一般的で包括的な特性による類型化とは異なり、旅行者行動の限定的側面の特徴を分類基準とした類型化が行われることも多い。

このような旅行者行動の特定側面にもとづく類型化の事例は、すでに、佐々木(1996b, 1997)の展望論文のなかで報告されている。それらのなかには、理論的な理念型を示すものもあれば、実証的データにもとづいて帰納的にクラスターを構成するものもあった。

理念型を示しているものでは、たとえば、Bello & Etzel (1985) は旅行のモチベーションとしての新奇性希求の程度によって「求新旅行」と「平凡旅行」を区別していたし、この新奇動機に関して、Lee & Crompton (1992) は、旅行者を「新奇性探求者」と「新奇性回避者」に二分していた。Pearce (1988) が提唱している「旅行キャリア」のモデルにも、旅行者を欲求段階的に分類する意図が含まれている。

他方、実証的分析による類型化の事例では、Shoemaker (1989) が、アメリカのペンシルバ

ニア州在住の50歳以上の男女における娯楽旅行（pleasure travel）の理由にもとづいて、家族旅行者、活動的休養者、高齢者と解釈される3クラスターを構成していた。〈以上の Bello & Etzel から後の4事例については佐々木（1996b）を参照のこと。〉

そのほかに、さきに紹介した Taylor（1986）が、カナダの成人の旅行価値観にもとづく4セグメントの構成に加えて、「特定の娯楽旅行に求める心理的効用」に関して4セグメント（家族で飛び出す、本家帰り、経験指向、活動的参加）を、また「その心理的効用の実現のために求める活動・興味・設備」に関して6セグメント（アウトドア、リゾート、B&B、都市文化、遺産、都市型遊興）を構成している実証分析の事例がある。さらに、Pitts & Woodside（1986）は週末旅行の目的地を選ぶ基準によって4クラスター（家族型、コスト・非集団型、快楽・非家族型、リラックス型）に分け、また Roehl & Fesenmaier（1992）は「休暇一般のリスク」と「特定の目的地でのリスク」の認知パターンによって3タイプ（場所リスク・グループ、機能リスク・グループ、リスク中立グループ）に区分していた。旅行目的地の認知的魅力に直接的に関連するものとして、Calantone & Johar（1984）は、マサチューセッツ州へ州外から車で来る旅行者の目的地選択理由の重要度評定にもとづくクラスター分析で、季節ごとに異なる特徴を示す5～6セグメントを見出し、Westvlaams Ekonomisch Studiebureau（1986）の同様の分析では、目的地ベネフィットの重要度評定にもとづいて7クラスター（活動的海岸愛好者、交際豊かに休暇を過ごす人、自然観察者、休息を求める人、発見者、家族指向的で太陽や海の愛好者、伝統主義者）が構成されていた。〈Taylor から後の5事例については佐々木（1997）を参照のこと。〉

こうしたモチベーショナルな側面ではなくて、Smith（1977）は、旅行者と訪問先との関係や地域住民に与えるインパクトという側面に着目し、七つの旅行者タイプを構成している（van Harssel, 1986. p. 153ff. より引用）。

1. 探索者タイプの旅行者 (explorer type tourists)：新しい発見や知識を求め、訪問先地域の積極的な参加観察者になり、そこの人々と深く接触したいと考えて、長期間滞在する傾向がある。
2. エリート旅行者 (elite tourists)：出発前にあらかじめ予約していた施設を利用し、高い経費を支出する。比較的型にはまらない長期間の滞在でいろいろな経験をし、鋭い地域観察もするが、そのライフスタイルに適応することはない。
3. 型破りの旅行者 (off-beat tourists)：旅行者の群から離れ、通常の規範を越えたことをしたり刺激に満ちた休暇を過ごす。時折にしか訪れない旅行者のための簡素な施設やサービスでも我慢する。
4. 変わった旅行者 (unusual tourists)：団体旅行に参加しても、1日を買物で過ごすのではなく土地の原始文化に触れるオプション・ツアーをする一方で、土地の祝祭を見るよりも普段通りの食事や飲み物を好むなど、変わった行動をする。

5. 初期的マス旅行 (incipient mass tourism) : 普通なら個人旅行や少人数旅行をすることが多い人が、比較的ありふれた目的地を選び、ガイド付きなど安全な旅をし、よい施設を利用し、快適さのためには支出が増えるのもいとわない。
6. マス旅行 (mass tourism) : 訪問者が絶えず殺到し、中間所得層が多数参加することによって成り立つタイプ。旅行者は、支払い分の元をとろうという態度で、よく訓練された多言語を話すホテルのスタッフが機敏で丁寧に応待してくれることを期待している。
7. チャーター旅行 (charter tourism) : 有名地に団体で行くが、その訪問先の人々や文化に最小限の関与しか示さない。このタイプの旅行者用に特に開発されたホテルや施設を求め、自分たちが普段しているレジャー活動を望み、安全で慣れた環境のなかで珍しいことをしたがる。

2-2 実証的類型化を集約する方向

(2-2-1) Lowyck et al. (1992) が挙げる代表的な研究事例

Lowyck, van Langenhove & Bollaert (1992) は、旅行者特性 (tourist role) に関する類型論的分析の代表的事例を紹介しているが、6事例のなかで実証的方法にもとづくものは5事例であり、そのうち、旅行者行動による類型は3事例 (Perreault, Darden & Darden, 1977 ; Westvlaams Ekonomisch Studiebureau, 1986 ; Gallup Organization, 1989)、一般的なライフスタイル／パーソナリティ特性による類型化は2事例 (Plog, 1987 ; Dalen, 1989) である。[他の1事例はCohen(1972)による理念型であるが、このモデルについては、本稿の4-1-2~3で詳述する。]

これらの類型化は、Lowyck et al. (1992) の説明によれば次の通りである。

<旅行者行動にもとづく類型化>

Perreault, Darden & Darden (1977) : レジャー・休暇・旅行に関するA I Oによる5タイプ

2000世帯に対する郵送調査で回収された335人による、休暇やレジャーでの行動に関する105項目から成る28尺度の評定結果のクラスター分析にもとづいて、休暇指向性の5タイプを識別している。

1. 経費重視の旅行者 : 旅行への関心が高く旅行情報を求めるが、経費節約に敏感である。所得レベルは中位。
2. 冒険者 : リラックス旅行の欲求は低く、冒険的であろうとする。経費にもかなり注意する。教育程度も所得レベルもかなり高い。
3. 家に引きこもっている人 : リラックス旅行なら楽しむが、本来、休暇旅行に関心がなく、

旅行情報を求めず、冒険的でない。他人と休暇の話をしない。所得は多いが、経済的見通しは楽観的でない。

4. 休暇を欲しがる人：休暇について計画したり考えたりするのが好きで、活動的である。

低所得で教育程度も低い。

5. 中間派：旅行をしたい気持ちは強いが、週末旅行やスポーツへの興味は低い。あまり活動的なライフスタイルではない。

Westvlaams Economisch Studiebureau (1986)：旅行目的地に求める魅力特性による 7 タイプ

ベルギーの成人による休暇目的地に関する29要素についての重要度評価の結果をクラスター分析して、7クラスターを構成した。〈佐々木（1997,p.59）で引用済み。〉

1. 活動的の海浜愛好者：海や海岸がある、外へ出かける、スポーツをする、を重視。

2. 交際豊かに休暇を過ごす人：手厚い歓迎、お互いのための時間を作る、新しい人と交際する、を重視。

3. 自然観察者：美しい風景を訪れる、親切な歓迎を受ける、を重視。

4. 休息を求める人：休息を求める、強さを回復できる、歩き回る、を重視。

5. 発見者：人々との交流、文化的な休暇、冒険、を重視。

6. 家族指向的で太陽や海の愛好者：美しい風景を訪れる、お互いのための時間を作る、親切な歓迎を受ける、食べ物がよい、子どもが親しめる活動、を重視。

7. 伝統主義者：安全・安定、驚くようなことは避ける、慣れた環境で過ごす、休息、食べ物がよい、を重視。

Gallup Organization (1989)：先進4カ国の調査で共通に見出した5グループ

先進4カ国（米国、西独、英国、日本）の成人対象の面接調査で約4000人のデータから、各国共通に五つの旅行者グループを見出した。

1. 冒険派：独立心や自信が強く、新しい活動や異文化経験を好む。旅行は生活の重要部分を占めている。教育程度も生活程度も高く、男性が多く、年齢は概して若い。

2. 心配派：旅行で感じるストレスを心配し、意思決定力について自信がない。空の旅は好まず、国内旅行が多い。教育程度や生活程度はやや低く、女性が多く、高齢者も多い。

3. 夢想派：旅行に興味を持ち、生活上の意味を重視する。新しい旅行先について読んだり話したりするが、それに見合う経験をするわけではない。新しい場所への旅行では地図や案内書を頼りにする。冒険よりもリラックスを好む。所得や教育の程度は中位で、50歳以上の女性が多い。

4. 節約派：リラックス旅行で満足し、生活上の新しい意味を求めようとはしない。旅行中の特別のサービスや楽しみに余計に支出する価値を認めない。所得は中位で、教育程度は平均よりやや低い。男性が多く、やや年輩である。

5. 耽溺派：旅行中のよいサービスや付加的な楽しみには追加支出し、自由のきく大きなホテルでの宿泊を好む。所得程度が高く、男女がほぼ同比率を占める。

<パーソナリティ／ライフスタイル特性にもとづく類型化>

Plog (1987)：パーソナリティ分析を基礎にした心理的連続体

飛行機旅行を好まない理由にパーソナリティが関わっているという考えから、飛行機を利用しない人々への深層面接を行ったところ、具体的な回避理由を見出すことはできなかったが、テリトリーについての束縛意識、一般的不安、能力欠如感などが認められたため、こうした特性を psychocentrism と命名した。つまり、psychocentric（自己限定的）は、小さく限られた問題領域に自分の考えを集中させていることで、その特性は、自分自身を気にして、冒険をせず、抑制的である、などである。これと反対の特性を allocentric（異種指向的）と呼んで、いろいろな活動に興味を向けることを指し、自信をもち、好奇心が強く、実験的なことが好きで、冒険を求める傾向があることとした。そして、この psychocentric と allocentric は一つの心理的連続体上の対極的な性質と考え、その中間段階に当たる多くの人がいることも想定しているが、Lowyck et al. (1992) は次の4タイプについて説明している。

1. the allocentric type：旅行を外国文化を発見する機会であるとみて、エキゾチックな目的地を好み、地域の居住者との交流にも努める。強いものや自由なものに満足を見出し、ギャンブルも好む。
2. the near-allocentric type：新しいライフスタイルを試みる機会を旅行に求め、挑戦の場を探す。特定の演劇や娯楽などを求めるテーマ旅行者は、このタイプに入る。
3. the mid-centric type：よく知られたところで友人や家族と一緒にリラックスしたり楽しみを味わうことを求める。休暇は日常性からの逃避を意味し、快適な交通手段や宿泊施設を選び、健康的で美しい場所に滞在して、沢山の土産物を買うことを好む。
4. the near-psychocentric and psychocentric type：旅行をすることは一種の文化的規範であり、世間体のために旅行しなければならないように思っている。非常に有名な所へ出かける。

(注) Plog (1987) の allocentric～psychocentric の連続体説は、Hudman & Hawkins (1989, p.44), Lavery & van Doren (1990, p.41), Ryan (1991, p.31) などにも引用されている。特に、Hudman & Hawkins (1989) は、Plog の研究の要約として、次の対照表を示している (p.45)。

[Psychocentrics]	[Allocentrics]
* 馴染みの深い目的地へ。	* 一般旅行者の行かない目的地へ。
* 目的地での活動はありふれたもの。	* 新しい経験。発見の感覚。

- | | |
|---|--|
| * 太陽や楽しいスポーツ。 | * その土地へ誰よりも早く。 |
| * リラックスする。 | * 新しく珍しい目的地へ。 |
| * ドライブを好む。 | * 飛行機を好む。高水準の活動。 |
| * 充実した旅行者用施設。
（多くのホテル、家族向きレストラン、
土産物店、など。） | * 宿泊・食事が適当にできる施設。
（必ずしも近代的でなくてよい、
アトラクションも少なくてよい。） |
| * 家族向きの雰囲気。
（例：ハンバーガーショップ）
家族向きの娯楽、外国の雰囲気がない。 | * 異文化や外国文化の人々との出会いや
交流を楽しむ。 |
| * 豊富な活動スケジュールの
完全パッケージ旅行。 | * 交通・宿泊施設など基本的条件は
事前に準備するが、相当な自由と弾力性
がある。 |

Dalen (1989) : 生き方に関する二つの基本的次元の組み合わせによる 4 セグメント

ノルウェーの代表的サンプル3000人への面接調査で、生き方や人生の目標について質問し、多次元分析で「現代的～伝統的」と「物質主義的～理想主義的」の2次元が見出されたので、その組み合わせによって次の4セグメントを構成した。

1. 現代的物質主義者：旅行から帰ったときの印象を強めるために肌を焼きたがり、新しい人に会えるナイトクラブやパーティを好む。休暇では、軽い娯楽、セックス、興奮できること、などが重要な条件になる。
2. 現代的理想主義者：知的な興奮や楽しみを求めている、雰囲気やよい友人がいることが重要であり、芸術、文化、新しい経験などを求める。マス旅行や固定的プログラムは望まない。
3. 伝統的理想主義者：質のよい内容、自然、文化、有名な場所、静寂や安全などで質の高い内容を求める。パッケージ旅行もするが、文化的なものを選ぶ。家族や親戚の訪問も多い。
4. 伝統的物質主義者：低価格の特別提供を探し、マス旅行やパッケージ旅行を望む。安全を重視し、一人になることを怖れる。

(2-2-2) 社会心理学的分類基準として共通性の高い特性

実証的研究としての旅行者行動の類型化では、その目的や調査・分析の方法を反映して、クラスター（セグメント）の数も異なり、その特徴のとらえ方もいろいろであるが、Lowyck et al. (1992) は、次のような特性が比較的多く見出されていると述べている（p.26）。

1. 冒険を探求する

2. 新しい文化を発見する vs. 日常の習慣に慣れ親しむ
3. 接触を求める態度
4. 休暇に費やす費用
5. 自然や本物性を重視する
6. 休息, 太陽, 海と砂を求める

また Lowyck et al. (1992) によれば, Plog (1987) は, 旅行者類型に関する多くの実証的分析を集約する観点から, 類型化のためのサイコグラフィック/パーソナリティ特性を整理すると, 次のような8カテゴリーになると述べている。(Lowyck et al. 1992, p. 27より引用。)

1. 冒険好き (venturesomeness): 探求的・探索的で, 旅行目的地への最初の訪問者になることが多い。
2. 快楽追求 (pleasure-seeking): 輸送・宿泊・娯楽など旅行のあらゆる面で贅沢さや快適さを欲する。
3. 無頓着 (impassivity): 旅行の意思決定を素早く行い, 計画なしでも決定する。
4. 自信 (self-confidence): 非常に多様なことをしたり, 目的地の選択や訪問地での活動で他人のしないことをする。
5. 計画好き (planfulness): 事前に十分に計画し, パッケージ・ツアーの案内書などもよく見る。
6. 男らしさ (masculinity): 活動好きで, 伝統的なやり方のアウトドア活動(例: フィッシング, キャンピング, ハンティングなど)をしたがる。妻はついていくか, 家に残されている。
7. 知識重視 (intellectualism): 目的地の歴史的・文化的なものに強い関心を寄せる。
8. 人間指向 (people orientation): 訪問先の人々との緊密な接触を望む。

(2-2-3) 社会心理学的な類型化の現状と方向

この節で見てきた社会心理学的実証分析にもとづく旅行者行動の類型化は「量的に少ない」とは必ずしも言えない現状にあると思われるが, それらの分析結果を相互に関連づけることは非常に困難であるという印象を強く与えられる。それは, 旅行者行動に関する類型化の作業が, 主に行政的・産業的な目的や必要性にもとづく具体的・限定的条件のもとで行われているためであり, また, そうした目的意識を継続することができる状況にないためであろう。同時に, そうした際に類型化の基礎にするための的確な行動的知見を体系的に提供できる共通枠組みが見当たらないこともあり, 結局は, 社会心理学的な旅行者行動研究の未成熟を物語るものであろう。

ところで, この節で見たところでも, 旅行者行動の類型化のために導入される行動的基準は比較的広い範囲に及んでいる。一般的 (パーソナリティ/ライフスタイル) 特性のみならず,

旅行者行動に限っても、包括的側面としては「領域特有の価値」（van Veen & Verhallen, 1986）や旅行ライフスタイル（A I O）があり、また、限定的な行動側面では、モチベーション（目的、心理的効用など）、目的地選択理由（認知的魅力、ベネフィットなど）、訪問地での行動（社会的関係、アトラクション利用など）などが中心になっている。

旅行者行動の類型化にあたっては、これらの側面における行動的知見が基礎になる。そこで、まず、各側面における知見の集積と体系化が求められ、それぞれの知識体系のなかのどの情報が旅行者行動の特徴をとらえるために有効であるのかを整理することが必要になる。とくに、具体的・政策的な目的で類型化が行われるときには、その目的との関連で旅行者行動の特徴を理解することができれば、それらを基礎変数として帰納的に構成される類型の性格が明確になり実践的利用価値を高めることができるだろう。

こうした意図的・仮説検証的な変数の選択とは異なり、多変量解析技法と計算技術の高度化に依存して、可能な限り多量の行動的変数を収集し、なんらかの多変量解析法によって多数の因子（次元）を抽出し、クラスター分析によってセグメントを構成するという方法がとられることも稀ではない。最終結果を手にするまでは、類型の実質的特性内容を予想することが難しいことが少なくない。このような形の分析にとどまる限り、幾度繰り返しても、個々の成果を蓄積し相互に関連づけることには限界があるだろう。

Lowyck et al. (1992) や Plog (1987) が試みているような、類型化の実証分析事例において高い頻度で見出される行動的特性（分類基準）を整理することは、そうした状況のなかでの知識集約の努力の表れであるが、これを類型化のために生産的に役立てるには、それぞれの行動的特性の心理的機能を明確に把握し、その特性を測定する操作的手段（たとえば、心理的尺度）を作り上げて、より多くの実証分析において共通に利用されることが必要になる。

旅行者行動の心理的・行動的な諸側面において、理論的な観点からの体系的枠組みを構築することは重要であるが、一過性の強い実証分析が数多く実施されている現状では、それらの結果を相互に関連づける経験的枠組みを作り出し、その普遍性と妥当性を高めていく努力が必要である。

3 「旅」の変遷と類型論的視点

3-1 旅の歴史をとらえるマクロ的アプローチ

(3-1-1) 「巡礼」から「旅行」へ：Smith (1992) による「聖から俗へ」

理論的な立場での類型論的アプローチのなかには、「旅」の目的や形態が時代とともに大きく変貌しているため、その歴史の変遷に注目したマクロ的分析が、旅行者や旅行現象の類型化に

通じるものがある。

たとえば Smith (1992) は、「旅」の起源には宗教的意義があるとしたうえで、その変遷を長期的で広い視点に立って「巡礼者～旅行者のパス (the pilgrim-tourist path)」という連続体でとらえ、その実質的特性に「神聖 (sacred) ～世俗 (secular)」の軸を設定している。

Smith の連続体では、「巡礼者 (神聖)」～「旅行者 (世俗)」の間に、その 2 要素が混じり合った状態が無数にあることが想定されているが、そのモデルでは、巡礼者的か旅行者的かを示す次の 5 タイプが例示されている (p.4) :

巡礼	宗教的旅行	旅行
a. 神聖	b.	c. 信心/世俗 d. e. 世俗
(知識にもとづく)				
<u>信心深い巡礼者</u>	<u>巡礼者>旅行者</u>	<u>巡礼者=旅行者</u>	<u>巡礼者<旅行者</u>	<u>世俗的な旅行者</u>

Smith (1992) は、その連続体 (パス) における「巡礼→宗教的旅行→旅行」あるいは「神聖→知識→世俗 (つまり、聖→知→俗)」という歴史的な流れを、次のように概観している。

「巡礼」は、人々が当面する問題の解決のために神の仲裁を願い出る目的の旅としてギリシャ時代に起源があるが、キリスト教徒の巡礼は 2 世紀頃に始まり、その目的地は、最初はエルサレム、次にローマ、後には救済に結びつく多くの聖地、というように変わっていった。そして、プロテスタントの勃興により、思想の自由が奨励され世界を知りたいという意欲が強くなるにつれて、「旅」にもその要素が加わって、知識を求める「宗教的旅行 (religious tourism)」が行われるようになった。この「宗教的旅行」は「知識にもとづく旅行 (knowledge-based tourism)」と呼ばれることもあるが、それは、寺院や特定場所を探し求めて行くものではあるが、巡礼のように信心からではなくて、歴史的・文化的な意味のある場所に自分が居るという一体感を体験したいためにされるものである。この動向は、冒険旅行をしたり博覧会・展示会へ行くことにつながり、「レジャー旅行」の成立に結びついていった。さらに、自動車の普及や大量交通機関の発達には国内だけでなく海外への旅を促進し、また、宗教の世俗化、産業社会の高度化、生活向上欲求の高まりなどもあって、個人的な楽しみを追求する「世俗的な旅行者」が急増してきた。

(3-1-2) 「巡礼」と「マス旅行」の対比：Cohen (1979) の「精神的センター」変化説

Smith (1992) の「巡礼～宗教的旅行～旅行」という次元の組み立て方に類似して、「旅」の形態の変遷を「巡礼からマス旅行へ」ととらえる視点が、Cohen (1979) によっても採用されている。彼は「巡礼」を「創始期巡礼 (archaic pilgrimage)」と「伝統的巡礼 (traditional pilgrim-

age)」とに分け、それらを現代の「マス旅行 (mass tourism)」と対比しているのである。

Cohen (1979) は、人々の究極の精神的 (宗教的、文化的、政治的など多様な側面を含む。) な拠り所となりその行動や生活に最終的な価値や意味を賦与する象徴的な人物・場所を「センター (centre)」と呼んでいるが、この「精神的拠り所」である「精神的センター (spiritual centre)」の所在が時代とともに変化しているため、それを希求したり維持しようとする行動である「旅」にも変化が生じてきたとして、巡礼からマス旅行までを理解しようとしている。

Cohen (1979) の論述を要約すると、次のようになろう (p.182-3) :

自分の生活空間 (life-space) の境界を越えて、必要性からではなく「楽しみを求めて旅をする」ということは、「よそ (out there)」で得られる経験が、自分の生活空間の内部では見いだせないものであり、そのことが旅を価値あるものにするからだと考えられる。

ところで、ごく単純化して言えば、原始社会では、通常、理想世界 (cosmos) が自分の生活空間と重なっているという意識があり、その外部には危険で恐怖に満ちた混沌 (chaos) があると考えられていた。神聖な精神的センターが自分の生活空間のなかにあると考える限り、その境界を越えてわざわざよそに出かけることはない。しかし、本当の精神的センターが経験的世界を越えた別のところにあるという強い神話的イメージが生まれた時には、周辺の混沌を乗り越えたところにパラダイスが成り立ち、パラダイス崇拝 (paradisiac cults) が生じ、大規模な旅や航海が行われることになる。このように成り立った「創始期巡礼」は、清純で悪も禍もない、想像上の神話的な土地を求めての探索であった。

その後「伝統的巡礼」がそのこと自体を目的とする非手段的旅行の主要な形態になっていった。伝統的巡礼者の精神的センターは、直近の生活空間の境界を越えたところにある「世界」にあった。これは、自分の限られた生活空間と「世界」を分離させることであるが、「世界」のイメージはきわめて広くて非常に多数の個別社会を包含していた。こうして、ユダヤ教徒やキリスト教徒の「世界」の精神的センターはエルサレムになり、イスラム教徒のそれはメッカになった。つまり、伝統的巡礼は、基本的には、宗教的な理想世界のなかの神聖な中心部に向けて、凡俗の満ち満ちた周辺部から移動することであった。

ところが、現代の「旅行」は、逆に、文化的中心部から周辺部への移動であると言えよう。次第に理想世界に関する伝統的な神聖イメージがなくなり、他者の文化的・社会的生活や自然環境についての興味が芽生えてきた。現代の「旅行」には、自分の世界のなかにある熟知しているものと比較して、「変わったもの」や「珍しいもの」に興味を感じたり評価することが含まれている。自分の「世界」の精神的センターを離れて、他の文化・社会の精神的センターに向けて移動するのである。

このように、巡礼と現代の旅行には、生活空間と「世界」についての異なる概念化と、社会的に構成された空間のなかでの自分の位置と訪問価値のある目的地との関係についての相反す

る見方とで、基本的な違いがある。ただ現実では、こうした基本的差異にもかかわらず、巡礼者と旅行者の行くこと（役割）が重なっていたり組合わさっていることが多い。

3-2 近代における旅行の性格の変化

(3-2-1) traveller と tourist : Boorstin (1962) が描く2類型

旅行者行動の時代的变化をとらえる視点が類型論的研究に結びついたという点から、その後の研究の流れに大きな影響を与えたのは Boorstin, D.J. (1962) であろう。

現に、旅行研究でもっとも先駆的な業績を残している Cohen, E. は「Boorstin の一般的洞察を旅行者特性 (tourist roles) の類型論の構成のための基礎となる変数に取り入れ、Boorstin が描く典型的旅行者の全体的イメージをより限定的で実証的に識別可能なタイプに分割した」と述べて、自らが Boorstin の現代旅行者論を吸収し発展させようとする類型論を提起したことを誇らしげに語っていた (Cohen 1988, p. 31-2)。

そのような立場として Boorstin が注目されるのは、著書 *The Image* (New York : Atheneum, 1962) [邦訳 星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代：マスコミが製造する事実』(東京・創元新社, 1964)] のなかで 'From Traveller to Tourist : The Lost Art of Travel' [邦訳「旅行者から観光客へ：失われた旅行術」(ただし筆者(佐々木)は、後述するように、これは「旅人(旅する人)から旅行者へ」と訳したほうがよいと考えている。)] という題目で、近代アメリカにおける旅行現象の変化を巧みに描き出しているからである。

Boorstin の詳細な分析の趣旨は、次のように要約できるだろう：

旅行の最も古くからある動機の一つは、未知のものを見ることであった。どこか他の場所へ行きたいという人間の欲求は、人間の楽観と好奇心の証拠である。旅行の盛んな時代には、精神の盛んな活動があった。遠方の地へ旅行し、珍しいものを見ることによって、人間は想像力を刺激され、驚きと喜びを発見した。そのために進んで困難に立ち向かおうとし、旅行経験は冒険 (adventure) だった。しかし、こうした文字通りの古い意味での traveller は、ごく少数になった。19世紀のなかば過ぎ頃から、最初はヨーロッパ人、次にアメリカ人による外国旅行の性格が変わり始め、この変化は現代になって頂点に達した。traveller は能動的であったが、今では受け身になっている。骨の折れる厄介な仕事である旅行を一生懸命にする traveller は減り、楽しみを求め面白いことが起こるのを待っている tourist が増えた。旅行経験が変質し、希薄化され、あらかじめ作られたものになっている。現代のアメリカ人の tourist は「疑似イベント (pseudo-event)」で経験を満たしている。ガイド付き旅行に参加し、旅行先の社会や人間の「本物」に触れずに隔離されて過ごし、巧妙に作りあげられた人為的アトラクションを通した間接的経験に満足している。アメリカ人の tourist は、こうした「疑似イベントの法則」に従う

準備ができている。その法則では、イメージ、すなわち巧みに作りあげられた模倣品のほうが、原物よりも美しく輝くのである。

こうして Boorstin(1962)は、traveller と tourist を識別した。それぞれの語源である travail（骨折り、労働、苦痛を意味する古い英語。）と tornus（円を描くのに用いる道具の意味から派生し、ひと回りして出発点に帰ってくることを。）を引用して対比的にとらえ、歴史的観点から「旅」の主演の変質を論じている。Boorstin（1962）の説明には、この2タイプを比較するために、「旅」における「危険～安心」「新奇～娯楽」あるいは「能動～受動」などの特性軸の上での区分に対応させた記述も見ることができる。

この Boorstin の論述について、Cohen（1988）は「旅行の研究（特に、社会学的研究）に最初の刺激を与えたものであり、より専門化された分析のための出発点になり、その後多くの研究者によって引用されることになった」と評価する一方で、その研究者たちは Boorstin が巧みに描き出した現代旅行者イメージの妥当性を批判する視点からその説を取り上げていると述べている。Cohen 自身も、

- a. 事実と意見を自由に取り混ぜて、面白いが全く一方的な主張をしていること
- b. 結論はオリジナルだが意見はオリジナルでないこと
- c. 彼が「これこそ旅行者だ」と考えたものの一般的特徴づけを行っていて、現実の旅行者のモチベーションや行為や経験などにある差異を一切見ないこと
- d. 彼の論拠を支持するために示している経験的事例は現代旅行者に関する体系的で均衡のとれた姿を示すものでは到底ないこと

などの点を指摘して、Boorstin を批判している（p.31-3）。

白幡（1996）も、旅行の社会学・人類学・思想史的把握は Boorstin に始まるとしながら、それは、旅行を「本物でない疑似体験」というカテゴリーで批判的にとらえ、「悪い」体験として描いており、そこには、人類にとってよきものだった「旅」が、悪しき「旅行」に駆逐されてきたという嘆きばかりが目につく、と述べている（p.249）。

（3-2-2） 「旅」から「旅行」へ：昭和初期における柳田國男の卓見

白幡（1996）は「旅」と「旅行」を区別し、「人類にとってよきものであった旅」と「悪しき旅行」という見方をふまえて、その著書『旅行ノススメ：昭和が生んだ庶民の新文化』（中公新書 1996）では「旅から旅行へ」（第1章の題目）という問題意識を貫いている。この問題意識に関して特に注目されるのは、白幡が着目しているように、この「旅から旅行へ」という視点が、わが国でも、昭和初期というきわめて早い時点で、民俗学者柳田國男によって明らかにされているということであろう。白幡は、柳田國男による昭和2年（1927）2月の駒場（第一高等学校）学友会での講演『旅行の進歩及び退歩』を引用している（p.3）：

タビという日本語はあるいはタマワルと語原が一つで、人の給与をあてにしてあるく点が、物貰いなどと一つであったのではないかと思われる。英語などのジャーネーは「その日暮らし」ということであり、トラベルはフランス語の労苦という字と、もと一つの言葉らしい。すなわち旅はういものつらいものであった。以前は辛抱であり努力であった。その努力が大きければ大きいほど、より大なる動機または決意がなくてはならぬ。だから昔に遡るにつれて、旅行の目的は限局せられている。楽しみのために旅行をするようになったのは、全く新文化のお陰である。

<この引用は、柳田國男『新編柳田國男集』（第3巻）筑摩書房、1978.p.36.からのもので、白幡が引用している『定本柳田國男集』（第25巻）筑摩書房、1970.とは異なり、表記が現代仮名づかいに改められている。>

この柳田國男（1927）の指摘が、Boorstin（1962）による同じ趣旨の論述が行われる「35年前」の「日本」で行われていることに大きな驚きを覚えるが、白幡（1996）は、この柳田説を受けて、「旅と旅行は、たんなる表現の違いをこえて、本質的に異なるものとみなしたほうがよい」（p.4）とし、「旅は苦行であるが、目的は別にあり、旅行はそれ自体が独自の価値をもっている」（p.5）と旅行を積極的にとらえる考えに立って、「旅行は旅とは異なる。旅行は移動に際しての無用な苦労や危険が取り除かれてできあがるものである。交通機関の発達や交通網の充実、そして宿泊設備・宿泊業の隆盛があって成立するのが旅行である」（p.6）と、旅行を性格づけている。

4 理論的体系化の試み

4-1 Cohen, E. による類型論的分析

(4-1-1) Cohen（1972）による社会学的な旅行者類型論

「苦しい旅から、楽しい旅行へ」という時代的变化をふまえて「旅行」について考えてみるとき、同時代に暮らす人々の「旅行」にもモチベーションの差異が相当に大きく、また、同一の目的地を訪れる人々の動機にも共通性と差異性が混じり合っているのが現実である（佐々木1997）。

そうした個人間の多様な差異を総括的にとらえるための類型論として、Cohen（1988）が、現代旅行者の「共時的類型論（synchronic typology）」（p.32）と呼んでいる一連の分析がある。

（ちなみに、彼は、Boorstinのアプローチを「通時的（diachronic）」であると述べている。）

その「共時的」類型論の最初のものとして、Cohen（1972）は、旅行者（tourist）を4タイプ

に分けている。その際の旅行者行動についての基本的な見方は、旅行経験にはある程度の熟知性 (familiarity) とある程度の新奇性 (novelty, または strangeness) が合わさっている、つまり、慣れ親しんでいる旧来の様式への安心とそれからの変化にもとづく緊張とが混じり合っていると考えるものであり、特定の旅行でどの程度の熟知性や新奇性が経験されるかは、実際上は、その旅行者の個人的な趣向 (tastes) や選好態度 (preferences) とその旅行の規格化状況 (institutional setting) に依存していると述べて、個々の旅行経験が個人特性と社会的関係状況に規定されることを想定している。

この「熟知性と新奇性の組み合わせ」は一つの連続体を構成していると見ているが、それを典型的に区分したときの典型像は次の4タイプになると考える。

1. 組織化されたマス旅行者 (the organized mass tourist) : 冒険的な姿勢が最も弱く、旅行全体を通して自分が普段から親しんでいる環境的雰囲気をはほとんどそのまま保ち続けている。旅行事業者 (tourist establishment) が提供するパッケージ旅行を商品として購入するので、旅行の行程は事前に固定化しており、立ち寄り先はよく準備されガイド付きである。自分自身で決定することはほとんどなく、もっぱら、自分の居住地で親しんでいたのと同じ雰囲気を持つ小環境 (microenvironment) の範囲内に留まっている。熟知性は最大で、新奇性は最小である。
2. 個人的なマス旅行者 (the individual mass tourist) : 第1タイプに類似しているが、完全な事前計画通りの旅行ではなく、旅行者が自分の時間と行程をある程度コントロールし、一つの特集集団として拘束されていないなどの点では異なる。しかし、その主要な準備手配は旅行会社を通して行われ、特に変わった行程内容になることはない。普段から親しんでいる小環境的雰囲気から飛び出すことが稀にあるが、それもよく整備された地域環境に入るだけである。熟知性は、第1タイプよりも小さいが、それでも優勢である。新奇性の経験はやや強いが、それも通常の域を越えることはあまりない。
3. 探索する人 (the explorer) : 旅行を独力で準備手配し、できるだけ普通のルートをはずれようと努めるが、あくまでも快適な宿泊施設や信頼できる交通機関を求めている。訪問先の人々と交際し、その言葉を話そうとする。上記の2タイプよりも、普段から親しんでいる小環境的雰囲気から離れようという気持ちは強いが、それに耐えられなくなる前に引き返すことができるような配慮もしている。新奇性が優勢であるが、訪問先社会に完全に夢中になることはなく、自分本来の生き方の常道や快適さをある程度保持している。
4. 放浪する人 (the drifter) : 常道からはずれ、また、慣れ親しんでいる自分の居住地の生き方をしないようにする。旅行事業者との関わりを一切持たず、普通の旅行者の経験はインチキだと考える。すべてを自分でやろうとし、自分を維持するために訪問先で臨時の仕事に就くことも多い。訪問先の人々と同じ生き方をし、住まいや食べ物や習慣を共有し、従来の自分の習慣の中の最も基礎的なところだけを残そうとする。定まった行程や日程は

一切持たず、目的地も明確には決めていない。訪問先社会の文化にすっかり心を奪われている。新奇性が最も高く、熟知性はほとんど完全になくなる。

前述のように、このタイプ分類のための基本的変数は「熟知性～新奇性」であり、その程度によって各タイプが位置づけられているが、この程度は、旅行者としての経験内容（以下の a～c）や彼が訪問先社会に及ぼす影響（d～e）に関係している（Cohen, 1974. p.177-181）。

- a. 旅の間に旅行者が経験する社会的接触の範囲と種類……「組織化されたマス旅行者」ではごく限られているが、独立度が増す「個人的なマス旅行者」では随時的な接触が生じるものの、それは旅行事業者の周辺に限られ、その頻度や性質には大きな限界がある。しかし「探索する人」ではより広範で多様になり、「放浪する人」では質的に深く、量的に広くなる。
- b. 旅行者が訪問先社会のメンバーとの間で交わす相互作用の様式……「マス旅行者」では相互作用が全然なく、ただ観察するだけのことが多い。他方「放浪する人」では、訪問先社会の人々の生活に身体的・感情的な関与（involvement）が生じることが多い。その中間が「探索する人」であるが、関与は生じないことが多い。
- c. 同じところで過ごす時間の長さ……「マス旅行者」の対極に「放浪する人」がある。彼らは、訪問先での滞在時間をあらかじめ定めておらず、そこが楽しいところであると分かれば、そこで社会的関与が生じるまで滞在することがある。
- d. 旅行が訪問先社会に及ぼす総体的影響……労働形態、エコロジー、土地利用パターンなどに見られるが、「マス旅行者」が増えると、その欲求に応えるために、訪問先社会の種々の制度や人々の役割に変化が生じ、いわゆる「旅行事業者」が発達する。この直接的な影響として、その社会に新しいアトラクションや施設・設備がつくり出され、これまでのものが改変され、旅行者用として別に設けられるなど、エコロジーに新しい次元が導入されてくる。2 次的には、たとえば、そうした旅行者用施設のために農業地帯が縮小し、地域農民が生活のために旅行者サービスに従事するなど、居住者の文化、生活スタイル、考え方などに大きな影響を与える。
- e. 「探索する人」や「放浪する人」が訪問先社会に与える影響……さほど大きいものではない。

(4-1-2) 「規格化」が異なる 2 タイプの旅行形態とその特徴

Cohen (1972) は、これらの 4 タイプをさらに集約して 2 タイプに分け、「組織化されたマス旅行者」と「個人的なマス旅行者」の 2 タイプを「規格化された旅行者 (institutionalized tourist)」と呼び、「探索する人」と「放浪する人」を「規格化されない旅行者 (noninstitutionalized tourist)」と呼んでいる。そして Boorstin (1962) が問題にしたのは前者だけだと批判するとともに (p.174)、それぞれの旅行者による旅行形態 (tourism) の特徴を検討している。

規格化された旅行

Cohen (1972) によると「規格化された旅行」には、次のような側面がある (p.169-174)。

- a. マス旅行は、パッケージとして販売され、標準化され、大量生産されている。交通機関、訪問先、宿泊・食事施設などがすべて事前に定められ、初めから終わりまで旅行者を旅行事業者側が完全に世話するようになっている。しかも、そうしたパッケージ旅行でも、新奇で変わった経験を意図的に提供できるように設計されており、マス旅行者になんらの身体的不快も感じさせずに訪問先地域の新奇さを経験させること、より正確に言えば、実際体験なしに観察のみさせることが重視されている。
- b. 旅行産業は非常に多数の人々（旅行者）に奉仕することが必要なために、人々の旅行の全局面を可能な限り効率的に、スムーズに、素早く進行させる必要がある。旅行者の経験は、本人にとっては新奇に感じられても、できるだけ秩序づけられ、見通しがきき、統制できるものにしてある。要するに、冒険の幻想を与えられるが、実際は、冒険のリスクや不確実さはすべて取り去られているのである。そうするために、旅行事業者側は「アトラクションの変形 (transformation of attractions)」と「設備・施設の標準化 (standardization of facilities)」と呼ばれる相互に関連し合う二つのメカニズムを採用している。
- c. 「マス旅行 (mass tourism)」の主目的は種々のアトラクションを訪問することである。それが仮に本物の新奇さをもっていたとしても、それを、マス旅行者の消費に適合するように変形・操作する傾向がある。それらは、付帯物を加えられたり、つくり代えられたり、風景的に美化されたり、不適切な要素が修正されたり、演出や管理が施されたりする。その結果、ほとんどがオリジナルの雰囲気や風景を失い、その訪問先社会の通常的生活実態や自然の素晴らしさから離れたものになる。
- d. 「アトラクションの変形」はマス旅行者に「管理された新奇性 (controlled novelty)」を提供するが、他方「施設・設備の標準化」は、マス旅行者が当面する環境のなかに熟知性を提供する。マス旅行を引きつけようとすると、主に先進国から来る旅行者の期待に釣り合うレベルで施設・設備を提供することが必要になり、そうした先進国的基準にもとづく旅行者用インフラストラクチャがつくり出される。ところが、旅行者は、訪問先地域の独特の雰囲気や「らしさ」も期待するので、ホテルやレストランや土産物店で「地域的なもの」を示すことになる。しかし、それらは一般に標準化されており、旅行者に熟知性を感じさせるものになっている。
- e. これら二つのメカニズムは、多数の旅行者を管理し満足させるために必要なものであるが、かえって、旅行者の経験の中に基本的な均一性や類似性を導入するものになる。旅行先地域の独自の文化や地勢の豊かさがいくつかの標準的要素に縮減され、マス旅行者にとっても個性を感じられないものになり、どこも「似たり寄ったり」になってしまう。つまり、マス旅行では「旅行の主たる動機は多様性、新奇性、奇妙性などへの欲求であるが、旅行の規格化が進むにつれて、そうした性質は低減する」というパラドックスが生じるのである。

- f. 旅行者に人気のある地域では、旅行者用のシステムとかインフラストラクチャが、その地域内の他の文化や生活の自然の流れから分離し、その地域の本来の居住者も、以前には親しんでいたアトラクションや施設・設備から、次第に遠ざかるようになる。マス旅行者は、訪問先社会に周囲を取り囲まれているが、そこには統合されていない独特の世界の中で旅をし、交流する相手も旅行事業者側の立場を代表するような人々になる。訪問先社会の居住者も、マス旅行者を、実在感のある個人とは見なくなる。
- g. マス旅行者が訪問先社会から孤立する傾向は、コミュニケーション・ギャップによってさらに増幅される。旅行者向けの出版物は、旅行事業者の立場から書かれていて、居住者の視点に立っていないことが多い。そうした出版物が旅行者の態度や期待をあらかじめ方向づけてしまう。旅行先の国の言葉が話せないことも居住者との交流を困難にし、自己流の旅をすることを難しくするので、その土地の文化や居住者に対して実在感のある感情を持つことができなくなる。
- h. 以上のことから、次のような仮説を提起することができる。つまり「マス旅行者の流れが大きくなるにつれて、旅行はより規格化し、より標準化して、旅行者と訪問先社会の生活との間の障壁は大きくなる」と。

規格化されない旅行

他方「規格化されない旅行」には、次のような側面があると述べている (Cohen, 1972. p.174-177)。

- a. この旅行には「探索する人」と「放浪する人」によって行われるものが含まれているが、両者の間には、主に、彼らが慣れ親しんでいる環境（「小環境 (microenvironment)」と呼ばれる。）から思い切って出て行き、旅行事業システムにとらわれない行動をする程度と、彼らが訪問する地域や人々に対する態度、という二つの面で違いがある。
- b. 「探索する人」はマス旅行や一般的な旅行者用アトラクションを避けようとするが、他方で、快適な宿泊施設や信頼できる交通手段を求めている。彼らは、マス旅行者にはあまり知られていない地域に入って自分流の楽しみを探すので、その経験は、訪問地の人々、場所、文化などに関してかなり広く深いものになる。しかし、訪問先社会と完全に一体化することなく、距離をおき、美的な観点から周囲を眺めたり、知的なレベルで人々を理解しようとする。したがって、本人は、マス旅行にあるような社会的孤立や人為性を避けることはできるが、他方では、その発見がマス旅行が求めている新しく刺激的なアトラクションとなり、その経験や意見は冒険的でない旅行者がそこを訪問する際の指標となって、結果的には、マス旅行の先兵の役割を果たす結末を迎えることもある。旅行事業者が高い商品価値として「プライバシー」や「閑静」を訴求する傾向もあって、「探索する人」の意識せざる手助けでマス旅行システムの範囲が拡大することが多い。
- c. 「探索する人」が昔の「旅する人 (traveller)」に対応づけられるなら、「放浪する人」は昔

の「さすらい人 (wanderer)」に当たるかも知れない。しかし「放浪する人」が生まれるのは、現代的な「豊かな社会」の現象である。彼らは、多くの場合、まだ職業に就いたことがなく、新しい経験を求めて世界を動き回ってモラトリアムを引き延しているが、そうした経験をしばらく味わった後、社会的中間階層の一部に落ち着くのである。

- d. 「放浪する人」は、初めて見聞きすることから感じられる興奮や全く違った人々との直接的接触を求める。自分の経験の新鮮さや自律性を守るために、意図的に日程表や時刻表を持たずに旅をし、目的地を定めていないこともあれば、目的もはっきりしていないこともある。ごく限られた移動手段しか用いないことが多く、できるだけ長く旅を続けるために費用の節約に心掛ける。費用を調達するために、訪問先で臨時の仕事に就くこともある。旅の間は身体的快適さにはとらわれず、できるだけシンプルに暮らそうとする。こうしたことから、訪問先社会のなかの比較的低い社会階層の人々とも接触し、知り合いになり、生活を共にする機会を持つことになる。
- e. 「放浪する人」は、自分が本来所属してきた社会で慣れ親しんでいる小環境を完全に離れ、訪問先社会と一体化しようとする。この点が「探索する人」と本質的に異なるところである。旅行事業者に抵抗する点でも、マス旅行者の対極に位置づけられる。

(4-1-3) tourist に関する操作的規定にもとづく 2 タイプ

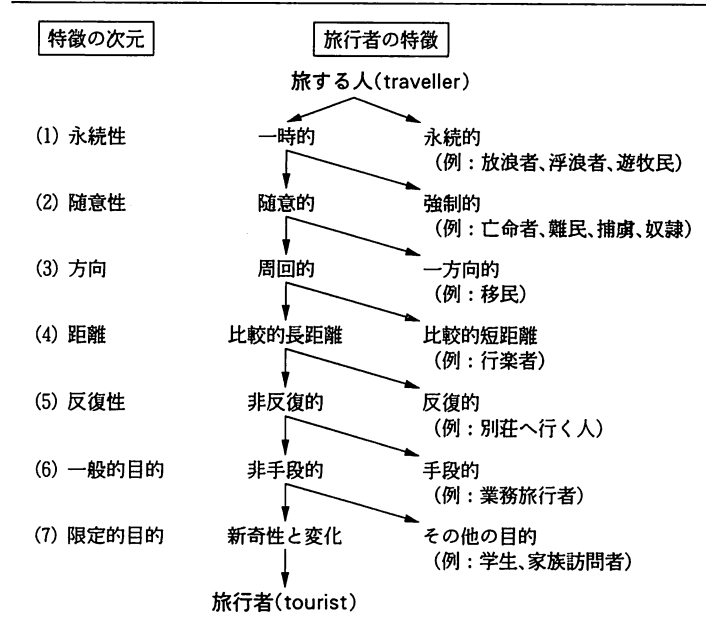
Cohen (1972) による 4 タイプは、旅行者 (tourist) と旅行事業者や訪問先社会との関係の程度で区分したものであったが、その後 Cohen (1974) は、tourist (旅行者) と traveller (旅する人) を区別する操作的規定をふまえ、旅行者の目的あるいは動機にもとづく 2 分類として sightseer (遊覧旅行者) と vacationer (休暇旅行者) を設定している。

この 2 分類の前提になる tourist と traveller の関係については、後者の traveller という一般のカテゴリーのなかで特定の条件を持っているものが tourist であるとして、それを図表 1 のような「概念的ツリー (conceptual tree)」と呼ぶ図式で表している。

この図式では、traveller という一般的概念が(1)~(7)の 7 次元(永続性、随意性、方向、距離、反復性、一般的目的、限定的目的)の特徴によって累積的に限定されていき、その結果として tourist が操作的に規定されるということが示されており、その操作的規定の各段階で tourist に該当しない traveller のさまざまなタイプが右側に例示されている。

こうして Cohen (1974) は、tourist を「比較的長距離の非反復的で周回的な移動 (trip) で経験される新奇さ (novelty) や変化 (change) から得られる楽しみ (pleasure) を期待して旅 (travel) をしている自由意志的で一時的な traveller」と規定している。この規定で「目的(あるいは、動機)」に関する特徴は「新奇さや変化から得られる楽しみを期待して」という点であるが、「新奇さや変化」や「楽しみ」は、それ自体を求めることが目的になる「非手段的目的 (non-instrumental purpose)」であるとして、旅行 (tourism) の特徴として重要な要件になってい

図表 1 Cohen (1974) による旅行者 (tourist) の特徴を規定する概念的ツリー



る。

ただ「新奇さと変化の経験」を通して求める「楽しさ」にも多種多様なものがあり、そこにも tourist を分類する根拠を見出すことができるかも知れない。

Cohen (1974) が試みている sightseer (遊覧旅行者) と vacationer (休暇旅行者) という区分は、いわば「楽しさの求め方の違い」に対応するものであると言える。この区分はあくまでも「理念型」であるが、その間には次のような違いを想定することができると考えている。

<u>sightseer</u>	<u>vacationer</u>
1. 目的……………「新奇さ」を求める	「変化」を求める
2. 反復性……………非反復的である	反復的傾向がある
3. 旅行パターン……………滞在より移動を重視	移動より滞在を重視
4. 目的地までの距離……………比較的遠くへ行く	比較的近くへ行く
5. 目的地の数……………より多くの目的地を含む	目的地は一つである
6. 目的地での活動……………アトラクション訪問を重視	施設や快適さを重視

(4-1-4) より包括的な旅行経験の分類

Cohen (1979) による「創始期巡礼→伝統的巡礼→現代の旅行 (マス旅行)」という「旅」の歴史的区分に関連し、前述のように、個々の旅行者にとって、自分が慣れ親しんでいるものとは別の文化的・社会的な生活や自然環境に対する興味や評価の意味が異なってきたところに、そ

の区分を裏付ける重要な違いがあることが論じられていた (3-1-2参照)。そうした「空間」イメージの特徴的差異は「巡礼」と「現代のマス旅行」を対極とする連続体として表されていたが、「現代のマス旅行」に焦点を当てた場合にも、その旅行が、旅行者の精神的センターにどのように関連するかでいろいろな差異があると考えられる。Cohen, E. のいう「精神的センター (spiritual center)」は、前述 (3-1-2) のように、人々の究極の精神的 (宗教的, 文化的, 政治的など多様な側面を含む。) な拠り所となり、その行動や生活に最終的な価値や意味を賦与する象徴的な人物・場所を示しているが、そうした精神的センターをどの程度探求するのか、その精神的センターの性質は何かということによって、旅行を比較し分類することができる。

Cohen (1979) の「旅行経験」の類型化は、こうした観点に立ち、旅行経験を次の五つのモード (型) に区分している：

1. レクリエーション・モード (the recreational mode)
2. 慰安モード (the diversionary mode)
3. 経験モード (the experiential mode)
4. 実験モード (the experimental mode)
5. 実存モード (the existential mode)

そして、これらのモードは、「珍しいものや新奇なものから得る純粹の楽しみを追求する旅行者 (tourist) としての経験」から「他者の精神的センターにおいて生きる意味を追求する現代巡礼者 (modern pilgrim) としての経験」までの範囲のなかで、順序づけられるものであるとしている。

<旅行経験の各モードの特徴>

以下で、各モードの特徴を概説する (Cohen, 1979 ; p.183-193)。

レクリエーション・モード

レクリエーションとしての旅行は、映画、演劇、テレビなどのエンターテインメントと本質的に似たもので、身体的・精神的な力を蓄え、一般的な幸福を感じることができる楽しみである。レクリエーションという言葉が意味するように、このモードは、究極的には、生命を活性化させる神聖な精神的センターに向けた宗教的航海に通じるところがあるが、そうした内容が世俗化され、深い精神的意味をなくしたものだと言える。このモードでは、旅行者は自分の経験を「面白い」と感じるだろうが、重要な意味は感じず、旅行を自己実現や自己拡張の手段として深くコミットすることはない。

このタイプの旅行はハイ・カルチャー (high culture) の一つと見られることが多く、そのようなものとして批判する人も多い (たとえば Boorstin, 1962)。つまり、このモードの旅行者は、訪問先の文化・習慣・作品・風景などが人為的に商業化されて提供されても満足し、本物でないもの (inauthentic) にごまかされ易いとも言われるが、それは彼らが無知だからでなく、「本

物」に執着していないことが多いからである。テレビ劇や映画で楽しくてリラックスさせてくれる経験を得る時、その「本物性 (authenticity)」を確認する必要がないように、その旅行を楽しむためには模造品でも複製品でも受け入れることができる。演劇やゲームをしている人のように、その機会を楽しむことは、たとえ偽物でも受け入れるという気持ちも伴っている。したがって、このモードでは、Boorstin (1962) によって攻撃されている「疑似イベント (pseudo-event)」にも満足できるのである。レクリエーションとしての旅行の意味は、精神的・身体的な機能回復であり、現代社会の厳しい生活に復帰するためにリフレッシュし活性化を果たすことである。このモードの旅行は、現代人にとって「圧力バルブ」のようなもので、日常生活で強い緊張圧力を受けたときには休暇というバブルを開いて圧力を低減させ、機能の適正な働きを回復させるのである。

慰安モード

決まり切った日々の過ごし方の退屈さや無意味さから逃避するだけで、レクリエーションの意味はなく、社会生活の疎外に耐えられるように身体を休め心を癒す時間を持つための旅行である。レクリエーション・モードに似ているが、精神的・身体的な機能回復の意味がないという点で違っている。しかし、ともに、現代の産業的都市社会が生み出す「マス旅行者」(Cohen, 1972) に特徴的なモードである (4-1-1参照)。

経験モード

このモードの特徴を見るためには「本物性 (authenticity) に対する宗教的な探求の現代版としての旅行 (tourism)」という視点から展開している MacCannell (1976) の旅行論が参考になる。彼の考えは、現代人は、日常を過ごしている自分の社会の精神的センターから疎外されているので、現状を越えた別のところで本物性の経験 (authentic experience) を得たいと思っているが、この欲求が旅行意識 (touristic consciousness) を動機づける。(同時に、旅行事業者が提供するのは「演出された本物 (staged authenticity)」であり、旅行者は、あたかも本物に触れたかのように感じさせられているという現代旅行の特徴を分析している。) そこで、MacCannell は、旅行を宗教的巡礼になぞらえているが、Cohen (1979) は、次のような重要な違いがあると指摘しつつ、経験モードの旅行についての説明を深めている：

- a. 巡礼者は常に彼の宗教の精神的センターに向けて旅をするが、そのセンターは、彼の通常の生活空間や親しんでいる社会の境界からはるかに離れたところにある。旅行者も彼の社会や文化の美的、宗教的、国家的その他のセンターに向けて旅をし、それに対する非常に強い尊敬の念を抱くが、現代の旅行の顕著な特徴の一つが、環境に対する一般的関心と旅行者自身の文化領域の範囲を越えた経験への欲求であって、旅行者を惹きつけるのは、そうした他所の風景、ライフスタイル、文化などの新奇さや珍しさであることが多い。
- b. 経験志向的な旅行者は、かりに他人の本物性に触れても、その「他人性」を認識するだけで自分の生活にとりいれることはない。本物の生活をしていると彼が考えた人々と一緒に暮

らしても、観察者的にそれを評価することを学ぶだけで、いわば、他人の生活の本物性を代理的に経験するだけにとどまる。他方、巡礼者は、地理的にはるかに離れた精神的センターにも緊密に心を通わせ、その精神的センターによって象徴される信念や価値に深く関与する。

実験モード

このモードの旅行者は、他人が本物の生活をしているという事実から楽しみや安心を引き出し、そうした生活を見るだけで満足する。かりに他人の本物の生活に参加しても、それに自分をコミットさせることはない。むしろ、彼は、最終的には自分の欲求に適合するものを見出したいと望み、いろいろな選択肢を試したり比較したりする。実験的な旅行者は、ある意味では、自分自身を探索する試行錯誤のプロセスにあるが、自分が何を探しているのか、自分の本当の欲求は何かを認識していないこともありうる。その探求は本質的には宗教的なものであるが、散漫ではっきり定めた目標がないことも多い。このモードが極端に表れたのがCohen (1972)の「放浪する人 (drifter)」である (4-1-1参照)。

実存モード

このモードは、旅行者が、自分の本来の社会や文化の主流の外にある一つの「選択可能な精神的センター (elective spiritual centre)」に深くコミットし、そのようなセンターを受け入れることが「世界観を変える (switching world)」ことになるような場合である。そうした精神的センターの象徴や価値の内容は、宗教的なものに限らず、文化的なもの、美的なもの、政治的なものなどがあるが、実存的経験を求める旅行現象が成り立つのは、多くの人々が、自分が選択し熱中している精神的センターに永続的に移動したままではないのではなく、その世界と自分の日常世界との間を行き来するからである。その点で、実存モードでの精神的センターへの旅は、現象的には、巡礼の旅に似ている。ただ、宗教的な巡礼は特定の精神的センターへの聖なる旅であり、そこから生きる意味を引き出して、自分の日常の世界や生活を清めるのである。そうした宗教的センターは「所与のもの」であって、個人の選択によって成り立つものではない。実存的旅行者の精神的センターは、日常的な世界の境界を越えたところにあるが、その旅は、周辺部から中心部へ向かうというのではなく、混沌とした状態から秩序だった状態へ、あるいは、意味のないものから本物として存在するものへ向かうものである。こうした実存的経験への望みは、宗教や政治の発祥地への旅に見られることが多いが、たとえば、移民が母国の郷里を訪れる旅やその子孫が先祖の出身地を訪れる旅にも認めることができる。

<精神的センターとの関係>

Cohen (1979) は、旅行経験の各モードは、現代人がその精神的センターとの関係をどのように形成しようとしているかを意味していると考えている。

「レクリエーション・モード」は、自分の精神的センターから移動することではあるが、それは、結果的に、その精神的センターへの関わりを強めることになり、個人を自らの精神的セ

ンターに方向づける意味がある。しかし、現代人は、自分の社会的あるいは文化的なセンターから疎外されることが多く、人によっては、どのような精神的センターをも求めないことがある。彼らの生活は意味のないものだが、そこに意味を求めることもしない。このような人の場合、旅行にはレクリエーションとしての意味もなく、ただ娯楽的なものになる。習慣的日常のなかで生じる退屈さや無意味さから逃避することを求め、心を空っぽにした忘我状態になって身体を休め心をなだめようとする。この「慰安モード」の旅行は、精神的センターのない人による意味の薄い楽しみである。

残りの三つのモードは、より深い意味を見出そうとする旅行の場合である。

疎外されている人が自分の疎外状況や毎日の生活の空虚さや愚かさを認識するようになったとき、とり得る方法として、改革を通して社会を変えていくという方向もありうるが、それほど過激でない選択肢として、他人の生活のなかに意味を見出すために旅行するということがある。自分の社会の境界を越えてその意味を求める旅をすることが「経験モード」の旅行である。このモードの旅行が成り立つのは、自分の精神的センターを失った人や自分の家庭では本物の生活をつくり出すことができない人が、他人の生活のなかの本物性を代理的に経験して自分にとって意味あるものにするときである。

「実験モード」の旅行者は、自分の社会の精神的センターを信奉せず、いろいろな方向の選択肢を探求する人であって、それだけに、旅行することが新しく重要な意味をもっている。

「実存モード」での精神的センターは、自分の日常的な居住の中心から離れたところにあるが、それは各人が価値意識のさまざまな領域で本物として選んだものであって、一つの理想を象徴している。

＜経験の実現しやすさ＞

このような旅行者経験の諸モードのなかには、単なる「慰み」を求める欲求によって動機づけられる「表面的」なものから、生きる意味を探求することによって動機づけられる「深い」ものまでの範囲がある (p.192)。これらの実現の容易さという点からみると、そのような動機づけが「深い」ほど、その実現が困難である (p.194)。

「慰安モード」は、その旅行経験が楽しければそれで十分なため、一番実現しやすい。「レクリエーション・モード」の実現には、楽しいだけでなく、その上に、その経験を通して元気回復機能が果たされることが必要になる。この二つのモードでは、旅行者は本物性に対する要求を持っていないので、その経験が裏切られることはない。その経験が「旅行者空間 (tourist-space)」のなかの演出によるものであっても、その旅行目的は達成することができる。他の種類のエンターテインメントと同様に、それが演出されていることをカモフラージュする必要もない。旅行者と旅行事業者は、お互いに、人工的仕組みのなかで取り引きすることに同意しており、実際、そうであることが面白さを増幅させることも多いのである。

ところが、他の三つのモードの旅行者では状況が完全に異なる。彼らにとっては、経験の本物性が旅行の意味づけにとって決定的に重要である。

「経験モード」の旅行者は、他人の文化・社会の本物に出会うことで納得する人たちであるため、本物性はその旅行経験にとって必要条件になるが、旅行事業者によって演出されている旅行者空間のなかで「誤った意識 (false consciousness)」を持たされることなく、あるがままの他人の生活に入り込んで観察するためには、一般的な旅行者が持っていない努力や熱心さやある種の世慣れた感覚が必要になる。何が偽物であるかを理解できないと、誤導されていても自分の目的が実現できたかのような錯覚に陥るが、ごまかし (deception) を見抜けたときには、そうした迷いはなくなるであろう。

「実験モード」の旅行者も本物性の問題に直面しているが、錯覚に陥る危険は小さい。この人たちは、他の生活形態を試すことが望みであり、それを経験するのに普通の平凡なやり方を離れて、批判力を鋭くしたいと思っているため、詮索好きであり、ごまかしに対する感度も高い。この人たちにとっては、自分が実験した生活様式のなかのどれかに関与できるかどうかの問題であるが、最初はそうした考えで実験していても、結局は「あれこれ外部を探し回る人 (external seeker)」になって、全体的な方向を見失い、どの社会からも疎外される結果になる危険性もある。

「実存モード」の旅行者にとって、実現の問題はもっとも深刻である。選択可能 (elective) な精神的センターへの関与やそこでの経験の本物性は充分なものでなく、最終的には、そのセンターでの「真実の生活」が自分の高い望みや期待に対してどれほどのものかということが問題になる。ところが、そうした精神的センターは一つの理想である。理想は漸近線的に近づくことはできても、完全には実現できないものである。エルサレムは聖都であっても、エルサレムという土地で実際に暮らしている人々の生活には「聖なるもの」とは言えないところもあろう。しかし実存的旅行者が精神的に理想の地に近づきたいと望むならば、必然的にその地理的場所に到着せざるをえない。そして、彼は、理想と現実の落差に直面するが、そこで自己への対応を誤れば、無意味、空虚、幻滅などの心理的危機に陥る可能性がある。

<新奇性との関係>

一般に、旅行者は、自分が慣れ親しんでいる環境 (小環境) を離れるにつれて、経験する新奇性 (strangeness) の程度が増していくことを感じるものである。旅行者が自己の社会・文化の精神的センターに固執していると、訪問先社会で親しみのない精神的センターに出会ったとき、脅威や困惑を感じるが多い。しかし、新奇性は、脅威であるだけでなく、魅力であったり挑戦対象になったりするところがある。これは、特に「経験モード」や「実験モード」の旅行者に当てはまり、「実存モード」で新しい精神的センターを探している旅行者にも言えることである。これらのモードの旅行者は、新奇性に接触することを望みこそすれ、避けることは

ない。また、訪問先社会で当面するカルチャー・ショックに悩まされることはなく、むしろ、旅行前に期待していたほどの差異を実感しないということもありうる。

4-2 理論的枠組みに関連した実証的研究

(4-2-1) tourist (旅行者) と traveller (旅する人) の概念に関する実証的分析

<Cohen (1974) の「旅行者 (tourist)」概念と Pearce (1982) による発展的検討>

旅行者行動の類型論に関してこれまで見てきた論議のなかで、traveller と tourist のとらえ方に違いが見られた。Boorstin (1962) は両者を対比的にとらえていたが、Cohen (1974) の概念規定では、上位と下位の概念的関係にあるものとされていた(図表1を参照のこと)。前者の立場には、「旅から旅行へ」という観点に立っている柳田国男 (1927) や、その柳田説を受けて旅行現象を論じている白幡(1996)が含まれるし、後者の立場には、World Tourism Organization (WTO) の分類が当てはまる。<WTOの分類については Mill (1990) からの引用を佐々木 (1996a, p.47) が紹介している。>

要するに tourism (旅行) はファジーな概念であり、tourist と non-tourist の境界は曖昧であって、さまざまな中間的カテゴリーが存在するというのが Cohen (1974) の考えであり、こうした曖昧さに取り組むには、traveller に含まれるさまざまなカテゴリーが「tourist という集合」のなかにどの程度の強さで所属するかを検討することが必要だと考えている (p.547)。

こうした Cohen (1974) の考え方を受けて、Pearce (1982) はファジー・セット理論 (fuzzy-set theory) にもとづく実証的な分析を試みている。

ファジー・セット理論では、一つのカテゴリーAは、種々の概念のそれぞれがAへの所属性の程度を表す0～1の間の特定の値に対応づけられることによって規定される、と考える。この考えを旅行者関連カテゴリー (traveller category) に当てはめた場合、種々の旅行関連の行動的特徴が各カテゴリーにどの程度の所属性を示すかということによって、各カテゴリーが規定されるということになる。

Pearce (1982) は、旅行者関連カテゴリーとして15タイプを設け、それへの所属性をみるために20項目の行動的特徴を用意した。それらのカテゴリーおよび行動的特徴は次の通りである。

旅行者関連カテゴリー (15タイプ)

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1. tourist (旅行者) | 2. traveller (旅する人) |
| 3. holidaymaker (行楽者) | 4. jet-setter (ジェット族) |
| 5. businessman (ビジネスマン) | 6. migrant (移住者) |
| 7. conservationist (自然保護者) | 8. explorer (探索する人) |
| 9. missionary (伝道師) | 10. overseas student (海外留学生) |

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 11. anthropologist (人類学者) | 12. hippie (ヒッピー) |
| 13. international athlete (国際競技者) | 14. overseas journalist (国際ジャーナリスト) |
| 15. religious pilgrim (宗教的巡礼者) | |

行動的特徴 (20項目)

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1. 写真を撮る | 2. 地域の人々を利用する |
| 3. 有名な場所へ行く | 4. 地域の人々を理解する |
| 5. 贅沢な暮らしをする | 6. 訪問先社会を鋭く観察する |
| 7. 環境に関心をもつ | 8. その経済に貢献する |
| 9. 心からは所属しない | 10. 身体的危険に挑む |
| 11. 訪問先社会に溶け込まない | 12. 一カ所に短期間滞在する |
| 13. 言葉に問題がある | 14. その地域の食べ物を試す |
| 15. いろんな場所を自分で探る | 16. 社会的地位を気にする |
| 17. 生きる意味を探す | 18. 感覚的快楽を求める |
| 19. 自分と同じような人々との交流を好む | 20. 土産物を買う |

そして、これらの各カテゴリーで、それぞれの行動的特徴について「全く所属しない (0)」から「完全に所属する (1)」までの5段階でとらえる評定を、大学を卒業したばかりの100人のオーストラリア人被験者に求めた。

<それぞれの旅行者関連カテゴリーの特徴とイメージ>

各カテゴリーへの所属性をあらわす値の絶対値でみた上位五つの行動的特徴は、図表2で順位が付されたものである。正の場合は、その特徴がそのカテゴリーに所属する度合いが強いが、負の場合には、逆に、所属しない度合いが強いことになる。

この結果によれば、tourist と traveller の違いは、tourist が「土産物を買う」「地域の人々を理解しない」という特徴が強いのにに対して、traveller は「地域の食べ物を試す」「いろんな場所を自分で探る」という特徴が強いところにあるが、「写真を撮る」「有名な場所に行く」「一カ所に短期間滞在する」という点は共通していることになる。

他方、各行動的特徴に対してどのカテゴリーが強い関連性を示したかについても、平均評定値によって比較することができる。

それぞれの行動的特徴との正あるいは負の関連性 (評定値) で上位5位に入るカテゴリーを拾い出すと、その数は、tourist では20項目のなかの10項目に、また jet-setter では11項目に及ぶのに対して、traveller では5項目、holidaymaker では4項目にとどまっている。特に、15カテゴリーのなかで tourist での評定値が一番高くてもっとも強い関連を示したのは「写真を撮る」「有名な場所へ行く」「(負で) 地域の人々を理解する [つまり、理解しない]」「心からは所属しない」「一カ所に短期間滞在する」「土産物を買う」など6項目にも達し、jet-setter では「贅

図表 2 15の旅行者関連カテゴリーへ高い所属を示す行動的特徴

旅行者関連カテゴリー 行動的特徴	1. tourist	2. traveller	3. holidaymaker	4. jet-setter	5. businessman	6. migrant	7. conservationist	8. explorer	9. missionary	10. overseas student	11. anthropologist	12. hippie	13. international athlete	14. overseas journalist	15. religious pilgrim
1. 写真を撮る……………	1	4	1	-3	5	-5	-3	3	5	-4	1	-4	1	3	-2
2. 地域の人々を利用する……………	3	3	2	5	-3	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
3. 有名な場所へ行く……………	-5				1	5	-4	3	2	1	3	-5	4	5	1
4. 地域の人々を理解する……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
5. 贅沢な暮らしをする……………					5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
6. 訪問先社会を鋭く観察する……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
7. 環境に関心をもつ……………					5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
8. その経済に貢献する……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
9. 心からは所属しない……………					5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
10. 身体的危険に挑む……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
11. 訪問先社会に溶け込まない……………					5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
12. 一カ所に短期間滞在する……………	4	1	3	1	5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
13. 言葉に問題がある……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
14. その地域の食べ物を試す……………					5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
15. いろんな場所を自分で探る……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
16. 社会的地位を気にする……………					5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
17. 生きる意味を探索……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
18. 感覚的快楽を求める……………					5	-4	5	5	4	1	3	-5	2	4	5
19. 自分同様の人々との交流を望む……………					2			1	2	3	5	-4	1	3	-5
20. 土産物を買う……………	2	4	1	-3	5	-5	-3	3	2	1	3	-5	2	4	5

(注) 数字は当該カテゴリーへの所属性を示す評定値(平均)の絶対値の大きさによる1～5位をあらわす。
ただし、マイナスは、その行動的特徴を否定する内容になることを意味している。

沢な暮らしをする」「社会的地位を気にする」「感覚的楽しさを求める」「自分と似た人々との交流を好む」という4項目であった。つまり、これら2カテゴリーの行動的特徴は明確に認識されており、ファジー度は低い。他方、travellerやholidaymakerが最高値を示す特徴は皆無であって、これらのファジー度は高いのである。その数量的指標として、Pearce(1982, p.33)は、Smithson(1980)によって開発された手続きによってファジー・セット指標を20カテゴリーについて算出しているが、ファジー度がもっとも低いのがtourist, jet-setter, explorerなどであり、逆にもっとも高いのがinternational athlete, overseas student, travellerなどであることがわかった。touristについては、travellerに比べて、明瞭なイメージが形成されていると言えるのである。

<多次元尺度分析による旅行者関連カテゴリーの5分類>

旅行者関連カテゴリーを個別的に見るのではなくて、相互の類似性や差異性を通してその類型化を図るために、多次元尺度分析も行われている（Pearce 1982, p.35）。

その2次元構造からは、次の五つのクラスターに分かれることが示されている。

- A. anthropologist, conservationist, explorer など社会・環境意識を持ち、冒険的で専門的な特徴をもつ「環境指向派」。
- B. overseas journalist, traveller, overseas student など訪問先地域の人々との深い接触を求めている「ハイ・コンタクト指向派」。
- C. tourist, holidaymaker が中核になり、jet-setter も関連するもので、一時的で、土産物嗜好や安全意識の強い「楽しさ指向派」。
- D. businessman を主体とし、地域の開発・利用意識を持ち、地位追求的な「開発指向派」。
- E. hippie, religious pilgrim, missionary など、訪問先社会にほとんど寄与せず、人生の意味を探っている「精神指向派」。

これらのクラスターの相互関係をみると、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ という位置づけを成り立たせる次元は「環境意識が強い \rightarrow 地域利用意識が強い」と意味づけすることができ、また、2次元の組み合わせから成り立つ平面でCとEが対照的な位置を占めているが、これはCohen (1972) が述べている「旅行の規格化の程度」に対応するものと解釈されている。（migrant と international athlete は上記5クラスターからはやや離れているが、「環境意識～地域利用意識」や「規格化の程度」でともに中間的で、他のクラスターとの関係も理解しやすい位置にある。）

（4-2-2）レジャー中心の行動的特徴にもとづく tourist の類型

<Cohen (1972) や Pearce (1982) をふまえた Yiannakis & Gibson (1992) の実証的分析>

旅行者行動に関して明確に識別できる安定的なパターンを初めて示したのはCohen (1972) による4タイプの提唱であったが、その説が観念的で思弁的であったのに対して、この問題への操作的・実証的な試みとして、旅行者関連カテゴリーの行動的特徴に関する多次元尺度分析によって五つのクラスターを区分したのがPearce (1982) であった。ただし、Pearce が取り上げている旅行者関連カテゴリーでは、「楽しみのため」という自己表出的 (expressive) な目的から旅行をしていると考えられるカテゴリーは tourist, jet-setter, holidaymaker, hippie などに限られ、職業的な義務や責任という手段的 (instrumental) な理由で各地を移動する missionary, overseas journalist, businessman, migrant など含まれていた。そこでYiannakis & Gibson (1992) は、旅行者行動を、旅 (travel) を伴って自分の住居から離れた場所へ行くレジャーの1形態と考えて、レジャー中心の旅行者行動の特徴の分析を行った。

Yiannakis らによる研究は1986年以降継続されてきたものであるが、当初は、Cohen (1979) や Pearce (1982) の概念化に依拠して36項目であった旅行者の特徴的タイプを、主成分分析や多次元尺度分析による一連の研究を通して13タイプに絞り込み、それらに sports lover を加え

た14タイプを図表3に示すように設定し、これらのレジャー中心の旅行者特徴を明らかにする潜在的次元を多次元尺度分析で抽出した。

調査では、これら14タイプの各々の特徴を表す記述内容がそれぞれ2項目作成され、成人521人（平均年齢37.5歳、大学卒47%、男性204人、女性317人）の対象者から、休暇のときの自分の行動に当てはまる程度（自己適合度）について5段階評定（5＝いつもその通り、0＝決してそんなことはない）を求め、タイプごとの2項目の評定値の合計を当該タイプの得点値とした。これらの項目の信頼性と妥当性は、大学生をサンプルとした分析であらかじめ確認されていた。

<多次元尺度分析による3次元の抽出とその機能的意味>

この自己適合度に関する相関行列データについての多次元尺度分析（SPSSのALSCAL）で、次のように解釈できる3次元が抽出された。

Y軸：thrill seeker, action seeker, drifter などから成るクラスターと escapist, independent mass tourist, organized mass tourist などから成るクラスターとが対極的に位置しており「刺激性～平穏性（stimulation～tranquility）」を意味する。「刺激性」には、珍しさや興奮などの感情的高揚から、挑戦、冒険、危険などに伴う危機的経験まで多様な性質が含まれ、「平穏性」は、常態的行動や新奇性回避に伴う安心、落ち着き、ストレス解消、日常的煩瑣からの逃避などを表している。

X軸：seeker, anthropologist, archaeologist などのクラスターと organized mass tourist,

図表3 Yiannakis & Gibson (1992) によるレジャー中心の旅行者の14タイプ

-
- a. sun lover (日光浴愛好者)：陽光・砂・海が豊かな温暖地でリラックスして日光浴を楽しむ。
 - b. action seeker (アクション好み)：パーティ好きでナイトクラブへ行き、異性と軽い恋愛経験をする。
 - c. anthropologist (人類学者)：地域の人々と出会い、その土地の食べ物を試し、その言語を話す。
 - d. archaeologist (考古学者)：考古学的な場所や遺跡に関心をもち、古代文明の歴史の学習を楽しむ。
 - e. organized mass tourist (組織化されたマス旅行者)：組織化された休暇やパッケージ旅行を楽しみ、写真を撮り、土産物を買う。
 - f. thrill seeker (スリル好み)：スカイダイビングのような、感情を高める危険で陽気な活動を好む。
 - g. explorer(探索する人)：冒険旅行を好む。人の行かないところを探査し、そこに行くための挑戦を楽しむ。
 - h. jet-setter (ジェット族)：休暇を高級リゾート地で過ごし、会員制ナイトクラブへ行き名士と社交を楽しむ。
 - i. seeker (探求する人)：自分自身や生きる意味をよく理解するために精神的・個人的な知識を求める。
 - j. independent mass tourist (独立したマス旅行者)：普通の旅行者用アトラクションを訪問するが、自分で旅行の手配をし、ときには即興の旅行をすることがある。
 - k. high class tourist (高級旅行者)：ファーストクラスで旅をし、最高のホテルに宿泊してショー見物をし、高級レストランで食事をする。
 - l. drifter (放浪する人)：ヒッピー・スタイルの生き方で、あちこち放浪する。
 - m. escapist (逃避する人)：気楽さを楽しみ、静かで安全なところで一切のことから遠ざかる。
 - n. sports lover (スポーツ愛好者)：休暇の間中好きなスポーツに積極的に没頭することを一番重視する。
-

sun lover, high class tourist, jet-setter などのクラスターとが対極を構成し「新奇性～熟知性 (strangeness～familiarity)」の連続体を意味する。「新奇性」は、新しさ、変化、環境予測がしにくいことなどを指しており、「熟知性」は、予測しやすく安全で親しみのある環境のなかでの快適や快楽を表すものである。

Z 軸：drifter, escapist, independent mass tourist などのクラスターと organized mass tourist, high class tourist, jet-setter などのクラスターが対極にあり「独自性～構造化 (independence～structure)」を意味する。「独自性」は、規格化の比較的低い状態で事前計画・実行体制・日程などで自発性を示すことを表し、「構造化」は、規格化の高い状態で事前計画・実施体制・日程などで確定的な要素が強いことを表している。

同じ方法による分析が男女別でも行われたが、3次元解による全体的パタンは男女間で非常に類似度の高いものであった (p.298)。

Yiannakis & Gibson (1992) は、これらの次元の機能的な意味について、Y 軸（刺激性～平穏性）は旅行目的地 (destination) における人々の感情的喚起の状態に関連し、X 軸（新奇性～熟知性）は旅行行動に期待したり実感する刺激経験 (stimulation) に関連する特性であると考えている。Z 軸（独自性～構造化）については、直接言及していないが、旅行の実行様式に関連する特性であると考えられよう。そして、これらの特性で構成される 3 次元空間 (Y×X×Z) のなかで個々の旅行者行動が位置づけられるとしているが、それは、この 3 次元空間に旅行者行動の類型化の理論的枠組みを求めるということである。

(4-2-3) Cohen(1972)のモデルの検討：Snepenger(1987)によるアラスカ訪問者の事例

旅行者行動の類型論的考察の先駆者である Cohen (1972) が提唱した旅行者の 4 タイプ（組織化されたマス旅行者、個人的なマス旅行者、探索する人、放浪する人）では、それらを区分する基本的特性が「熟知性～新奇性」であり、そのモチベーショナルな差異が旅行訪問先の社会的関係状況との接触の仕方の違いに結びつくことが示されていた (4-1-1参照)。

Snepenger (1987) は、これを図表 4 のように描いている。

図表 4 Snepenger (1987) による Cohen (1972) の類型論の図式化

新奇動機（連続体）：	熟知性			新奇性
	↓	↓	↓	↓
利用する旅行者用 インフラストラクチャー：	ガイド付き 旅行	遊覧・ 行楽	宿泊施設・ 交通機関	最少限 ～皆無
	↓	↓	↓	↓
旅行者の特徴：	組織された マス旅行者	個人的な マス旅行者	探索する人	放浪する人

そして Snepenger は、このモデルがマーケット・セグメンテーションの基礎として応用でき

るとして、1982年10月から1983年 9 月までの期間に、アラスカで休暇旅行を終えて高速道路、フェリー、遊覧用船舶、航空便などで離れようとしている旅行パーティ約6,000組の代表者に質問紙調査を行い、このうちビジネス旅行者や近親訪問者を除く2,730組のデータを分析した。

質問内容は、Clawson & Knetsch (1966) の 5 段階モデル（旅行に関する期待と計画、目的地への行き方、訪問先での行動、帰り方、旅行についての評価）にほぼ対応させ、Cohen モデルで基本的特性とされている「新奇性」連続体によるセグメンテーションが有効か、そのセグメンテーションで構成される旅行者類型のデモグラフィック特性には差異が見られるかなどともに、5 段階でとらえる旅行者行動の各側面にも類型間の差異が認められるか否かをとらえようとした。

具体的には、図表 5 に掲げた内容について、それぞれの操作的規定にしたがって回答が求められた。

この図表の「セグメンテーションの基礎」に示されているように、Cohen (1972) モデルの 4 タイプ中の「放浪する人」は調査内容の制約から独立させることができなかったため、他の 3 タイプについての比較分析が行われた。

3 タイプの構成比は「組織化されたマス旅行者」が54% (1479組)、「個人的なマス旅行者」が20% (542組)、「探索する人」が26% (709組) であったが、これらの間には、図表 5 に示されているすべての細目で統計的に有意な差が認められた。その結果の内容を要約すると図表 6 のようになる。

こうした結果について、Snepenger (1987) は、Cohen (1972) のモデルで描かれている旅行者の態度や行動の特徴にほぼ一致すると考えて、そのモデルが旅行者セグメンテーションの基礎として有効であると結論づけている (p.13)。

4-2 基礎概念の統一的理解の問題について

旅行者やその行動・経験の類型化に関する理論的アプローチについて Cohen, E. の論述を中心にみてきたが、本稿は、その説明力や妥当性を論じることができる研究的段階に至っておらず、また、比較検討することができるほど多くの類型論的文献を集約しているものでもないが、あえて指摘すれば、こうした理論的立場からの類型論的研究に取り組むための基礎として、まず「概念」上の問題について検討すべきことがあると思う。

特に問題になるのは、traveller と tourist の概念的意味および両者の関係であろう。

Cohen (1974) の「概念的ツリー」(図表 1) は両者の間の包摂関係を明瞭に記述しており、Pearce (1982) の多次元尺度法による旅行者関連カテゴリーのクラスター分析でも両者の行動的イメージの違いを示していたが、それぞれの概念が、いかなる行動状態にある人間を指すのか、両者の関係をどのように理解するのか、ということを整理する必要があるのである。興味をひく認識として「旅から旅行へ」や「from traveller to tourist」という論述があったが、こ

図表 5 Snepenger (1987) による旅行者パーティのセグメンテーションとその説明変数

[セグメンテーションの基礎]	
パーティの特徴	<p>A. 組織化されたマス旅行者：休暇中のほとんど、または全部を組織化された旅行で過ごす。</p> <p>B. 個人的なマス旅行者：休暇中に遊覧・行楽のツアーに特別参加した。</p> <p>C. 探索する人：自分で計画した休暇を過ごした。</p>
[セグメントの説明変数]	
1. 旅行パーティ	<p>1a. 男性比：パーティ内の男性の%。</p> <p>1b. サイズ：パーティの人数。</p> <p>1c. 平均年齢指数：18歳以下＝1～65歳以上＝7、とする個人別評点の平均値。</p>
2. 休暇の計画	<p>2a. 作成期間：旅行前の計画期間（週）</p> <p>2b. 情報探索指数：計画中に利用した情報源の種類（9種類のなかの選択数）。</p>
3. 交通機関	<p>3a. 民間航空：往路での民間航空の利用の有無。</p> <p>3b. 船：往復での旅客船の利用の有無。</p> <p>3c. 車：往路での乗用車・キャンパーの利用の有無。</p>
4. 旅行行動	<p>4a. 支出額：パーティの全支出額（ドル）。</p> <p>4b. レジャー活動指数：旅行中に行ったレジャー活動の種類（14種類のなかの選択数）。</p>
5. 評価	<p>5a. 休暇：休暇全体を5段階評定（よくなかった＝1～素晴らしかった＝5）。</p> <p>5b. 価値：支出に見合う価値に関する5段階評定（低い価値＝1～高い価値＝5）。</p> <p>5c. 再訪問意図：再訪問計画を5段階評定（絶対ない＝1～絶対ある＝5）。</p>

図表 6 Snepenger (1987) の分析による旅行者パーティの3セグメントの間の特徴的な差異

	組織化されたマス旅行者	個人的なマス旅行者	探索する人
1a. 男性比	女性が多数（男性42%）	男女ほぼ同数（男性48%）	男性が多数（男性60%）
1b. サイズ	1～2人（平均1.6）	約2人（平均1.9）	約2人（平均1.9）
1c. 平均年齢	50代後半	40代後半～50代前半	30代後半～40代前半
2a. 計画期間	20.7週	24.4週で最長	20.1週
2b. 情報探索	1.9種類 (82%が旅行会社を利用)	2.2種類で最多 (州情報をよく利用)	1.8種類 (概して利用度が低い)
3a. 民間航空	49%で特に多い	21%	32%
3b. 船	40%	34%	13%で少ない
3c. 車	3%で特に少ない	27%	36%で多い
4a. 支出額	\$ 4190で特に多額	\$ 3269	\$ 2044で最少
4b. レジャー活動	2.2種類 (特に多いものがない)	2.9種類 (異文化学習では最多)	2.1種類 (魚釣りでは最多)
5a. 休暇評価	4.1	4.0	3.6で最低
5b. 価値評価	3.5	3.4	2.8で最低
5c. 再訪問意図	2.8で最低	3.1	3.0

(注) すべての変数でセグメント間に有意差が見られた。

うした認識の意味するところも、そうした整理をふまえて検討することが求められるだろう。

問題を「旅行者行動 tourist behavior」に絞った時にも、それがいかなる行動領域を指すものかについて検討する必要がある。ここでは、旅行における「ビジネス（業務）」の要素が含まれるか否か、あるいはCohen (1974) の言う「手段的」なものを含めるか否か、が問題になろう。Cohen (1974) の「概念的ツリー」では、ビジネス旅行者 (business traveller) は一般的目的

のレベルで「手段的」であるとして、tourist の範疇に入っていないが、佐々木 (1996a, p.47) が引用しているWTO (World Tourism Organization) の規定では、tourist の動機に「レジャー」と「ビジネス」の両面が含まれている。また tourism に関する概説書にある用語解説でも、次の例のように、tourist について異なる説明を見ることができる：

Mill, R. C. (1990) : *Tourism : The International Business*. Prentice-Hall. p. 359.

Tourists=Person who travels for reason other than employment or personal business. The United Nations defines tourist as one who spends more than one night but less than a year away from home for pleasure or business, except diplomats, military personnel, and enrolled students.

Bhatia, A. K. (1983) : *Tourism Development : Principles and Practices*.

Sterling Publishers Private Limited. p. 320.

Tourist=A temporary visitor staying at least twenty-four hours in the country visited and the purpose of whose journey can be classified under one of the following headings : (i) leisure (recreation, holiday, health, study, religion and sport) ; (ii) business, family, mission, meeting.

こうした問題は、旅行者類型の理念型を構成する場合、その理念型でカバーされる旅行者行動をどれほどの範囲にするのか、その分類軸（次元）をいかに設定するのかという基本的条件にかかわる重要な問題である。そのため、諸説の理論的集約が求められるところであり、それを共通の土俵として、そのなかのどの側面で旅行者行動の類型化を図るかというアプローチの違いが検討され、また、その類型化を説明力や識別力の面から比較することができるようになるものと考えられる。

5 中間的まとめ：本稿における暫定的認識

本稿は、旅行者行動に関する類型論的研究について、社会心理学的な実証分析と理論分析の概要を「中間的」に整理したものであるが、文献展望の広さと深さにおいてまだ不十分なレベルでしかなく、この研究領域の体系的把握のための一つの足がかりを得る試みに過ぎない。そのため、この「まとめ」も、ごく限られた範囲内での「印象」を述べるにとどまらざるを得ないが、そうした立場からの若干の論点について考えておきたい。

まず、実証分析の多様な展開と理論分析の限定的なあり方がある種の対照を示しているという印象がする。

このことは、必ずしも実証分析の水準が高いことには通じておらず、数多くのデータ分析が行われてはいるが、理論的な蓄積を図る方向で着実に前進しているとは言えないということ

感じさせられる。多くの具体的分析では、「旅行」というコンセプトの通俗的・一般的理解にもとづいて、それに関連する種々の行動的・心理的特徴が任意に取り出されて類型化の要素とされており、一過的な個別的分析作業がほとんど相互の関連もなく行われている。

社会心理学的立場からの旅行者行動の類型化を、こうした特殊的・個別的事例としてでなく、より普遍的な適合性を持つ類型を構成する方向で展開するためには、その基礎となる心理的・行動的領域での一般的な知見が求められ、それらの知見の体系的蓄積が必要条件になる。そこから、多面的な行動的・心理的特徴にもとづいて「類型化」が行われることを期待するのであるが、こうした方法による「類型化」は、種々の領域別知見を相互に関連づけ集約する方法論の一つになるものと考えられる。

旅行者行動に関する心理学的課題について、佐々木 (1996a) は、1. 消費者特性、2. 旅行のモチベーション、3. 旅行の意思決定、4. 旅行の実行行為、5. 旅行の事後評価と関連行動、6. 目的地・通過地への影響、7. 旅行者行動の類型論的問題、という7領域に集約していたが(p.53-4)、ここで最後に掲げている「類型論的問題」に取り組むためには、1～6の各領域の研究成果を集約し、それぞれの領域で知見の体系化を図ることが前提になるのである。

他方、理論分析では、本稿は、Cohen, E. の初期の論を見るだけにとどまり、その理論の発展を系統的に追跡するところまで至っていないし、他の理論的類型論との比較検討も行っていない。現状は、この研究課題についての「点」をわずかに抑えたところである。しかし、日常的な労働や生活行動との関連づけのうえで「旅行」の心理的・行動的な意味をより深くとらえることが、その「類型論」を成り立たせる基礎になるものと思われる。そのためには「旅」に関する歴史的視点とともに、「旅行」との関連において、生活行動に関する現代人の認識や期待を把握することが重要になる。

今後の研究では、実証分析における拡散的傾向を蓄積的方向に向かわせるような体系的枠組みと、その枠組みを支える理論的基盤が必要である。

当面は、概念的に未成熟である「旅行者行動」について一定の共通理解を作り上げることが先決条件になるが、それとともに、その主要側面に関する知見を発展的に体系化するための方法論として「類型化」があると認識することが重要であろう。単なるタイプ分類に終わるのではなく、現象的な旅行者行動と基底的な説明要因との関連を記述する理論的枠組として「類型論」が発展することを期待するものである。

文 献

- Bello, D.C. & Etzel, M.J. (1985) The role of novelty in the pleasure travel experience. *Journal of Travel Research*, Summer. 20-26.
- Bhatia A.K. (1983) *Tourism Development : Principles and Practices*. Sterling Publishers Private Limited.
- Boorstin, D.J. (1962) *The Image*. New York : Atheneum. [邦訳：星野郁美・後藤和彦訳 (1964) 幻影の時代：マスコミが製造する事実. 東京・創元新社]
- Calantone, R.J. & Johar, J.S. (1984) Seasonal segmentation of the tourism market using a benefit segmenta-

- tion framework. *Journal of Travel Research*, Fall. 14-24.
- Clawson, M. & Knetsch, J.L. (1966) *Economics of Outdoor Recreation*. Baltimore : John Hopkins. [Snepenger(1987)から引用.]
- Cohen, E. (1972) Toward a sociology of international tourism. *Social Research : An international Quarterly of the Social Sciences*, 39(1). 155-186.
- Cohen, E. (1974) Who is a tourist? : A conceptual clarification. *Sociological Review*, 22. 527-555.
- Cohen, E. (1979) A phenomenology of tourist experiences. *Sociology*, 13. 179-201.
- Cohen, E. (1984) The sociology of tourism : Approaches, issues, and findings. *Annual Review of Sociology*, 10. 373-392.
- Cohen, E. (1988) Traditions in the qualitative sociology of tourism. *Annals of Tourism Research*, 15(1). 29-46.
- Dalen, E. (1989) Research into values and consumer trends in Norway. *Tourism Management*, 10(3). 183-189. [Lowyck et al. (1992) から引用.]
- Fodness, D. (1994) Measuring tourist motivation. *Annals of Tourism Research*, 21(3). 555-581.
- Gallup Organization (1989), commissioned by American Express Travel Service Company, Inc. and taken from American Express News Release(1989). Unique Four Nation Travel Study Reveals Traveller Types. [Lowyck et al. (1992) から引用.]
- Gladwell, N.J. (1990) A psychographic and sociodemographic analysis of state park inn users. *Journal of Travel Research*, Spring. 15-20.
- Hudman, L.E. & Hawkins, D.E. (1989) *Tourism in Contemporary Society : An International Text*. Prentice Hall.
- Lavery P. & van Doren, C. (1990) *Travel and Tourism : A North-American-European Perspective*. Elm Publications.
- Lee, T. & Crompton, J. (1992) Measuring novelty seeking in tourism. *Annals of Tourism Research*, 14. 553-575.
- Lowyck, E., van Langenhove, L. & Bollaert, L. (1992) Typologies of tourist roles. In Johnson, P. & Thomas, B. eds. (1992) *Choice and Demand in Tourism*. Mansell Publishing Limited. 13-32.
- MacCannell, D. (1973) Staged authenticity : Arrangements of social space in tourist settings. *American Journal of Sociology*, 79(3). 589-603.
- Madrigal, R. & Kahle, L.R. (1994) Predicting vacation activity preference on the basis of value-system segmentation. *Journal of Travel Research*, 32(3). 22-28.
- Mill, R.C. (1990) *Tourism : The International Business*. Prentice Hall.
- Pearce, P.L. (1982) *The Social Psychology of Tourist Behaviour*. Pergamon Press.
- Pearce, P.L. (1988) *The Ulysses Factor : Evaluating Visitors in Tourist Settings*. Springer-Verlag.
- Perreault, W.D., Darden, D.K. & Darden, W.R. (1977) A psychographic classification of vacation life styles. *Journal of Leisure Research*, 9. 208-24. [Lowyck et al. (1992) から引用.]
- Pitts, R.E. & Woodside, A.G. (1986) Personal values and travel decisions. *Journal of Travel Research*, Summer. 20-25.
- Plog, S.C. (1987) Understanding psychographics in tourism research. In Ritchie, J.R.B. & Goeldner, C.R. (eds.) *Travel, Tourism, and Hospitality Research. A Handbook for Managers and Researchers*. John Wiley & Sons. 203-213. [Lowyck et al. (1992) から引用.]
- Roehl, W.S. & Fesenmaire, D.R. (1992) Risk perceptions and pleasure travel : An exploratory analysis. *Journal of Travel Research*, Spring. 17-26.
- Ryan, C. (1991) *Recreation Tourism : A Social Science Perspective*. Routledge.
- 佐々木土師二 (1996a) 「旅行者行動の心理学」に向けて. 関西大学社会学部紀要, 27(3). 39-55.
- 佐々木土師二 (1996b) 旅行者モチベーション研究の展望 : 「旅行者行動の心理学」に向けて(2). 関西大学社会学部紀要, 28(2). 27-68.
- 佐々木土師二 (1997) 旅行目的地の魅力に関する研究 : 「旅行者行動の心理学」に向けて(3). 関西大学社会学部紀要, 28(3). 41-73.
- Shih, D. (1986) VALS as a tool of tourism market research : The Pennsylvania experience. *Journal of*

- Travel Research, Spring*, 2-11.
- 白幡洋三郎 (1996) 旅行ノススメ：昭和が生んだ庶民の「新文化」, 中央公論社 (中公新書).
- Shoemaker, S. (1989) Segmentation of the senior pleasure travel market. *Journal of Travel Research, Winter*, 14-21.
- 総務庁統計局 (1988) 国民の生活行動：昭和61年社会生活基本調査の解説, 大蔵省印刷局.
- 総理府広報室 (1995) 余暇と旅行, 月刊世論調査, 27(5), No.312, 38-78.
- 総理府内閣総理大臣官房内政審議室 (1987) 観光レクリエーションの実態：第6回全国旅行動態調査報告, 大蔵省印刷局.
- Smith, V.L. (1977) *Hosts and Guests*. University of Pennsylvania Press. [van Harssel(1986)から引用.]
- Smith, V.L. (1992) Introduction : The quest in guest. *Annals of Tourism Research*, 19, 1-17.
- Smithson, M. (1980) Note on fuzzy set analysis. Unpublished manuscript, Department of Behavioral Sciences, James Cook University. [Pearce (1982) から引用.]
- Snepenger, D.J. (1987) Segmenting the vacation market by novelty-seeking role. *Journal of Travel Research, Fall*, 8-14.
- Taylor, G.D. (1986) Multi-dimensional segmentation of the Canadian pleasure travel market. *Tourism Management, September*, 146-153.
- van Harssel, J. (1986) *Tourism : An Exploration (2nd ed.)*. National Publishers.
- van Veen, W.M.O. & Verhallen, T.W.M. (1986) Vacation market segmentation : A domain-specific value approach. *Annals of Tourism Research*, 13, 37-58.
- Westvlaams Economisch Studiebureau, Afdeling Toeristisch Onderzoek (1986) Toeristische gedragingen en attitudes van de Belgen in 1985. Brussels : Reeks vakantieonderzoeken. [Lowyck et al. (1992) から引用.]
- 柳田國男 (1927) 旅行の進歩及び退歩, 新編 柳田國男集 (第3巻), 筑摩書房, 1978, 34-65.
- Yiannakis, A. & Gibson, H. (1992) Roles tourists play. *Annals of Tourism Research*, 19, 287-303.

—— 1997.9.30受稿 ——